さむらいの巣

池波正太郎

It was a tragic quirk of fate.
A samurai's stormy life.
Shotaro Ikenami

PHP文庫



さむらいの巣

池波正太郎



PHP文庫

さむらいの巣

池波正太郎



PHP文庫

○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○紋章＝上田晃郷

目次

さむらいの巣　5
無惨やな　猿子橋母子の仇討ち　79
真田信之の妻——小松　97
真説　決戦川中島　125
関ヶ原古戦場を往く　163
豊臣秀吉　181
実録・鬼平犯科帳　205
解説　八尋舜右

さむらいの巣

一

徳山権十郎が生れたのは、元禄三年の夏であったが、そのころはもう武士の世界に戦火が絶えてから、七十年もたっていた。

「なぜ、おれは、さむらいの家などに生れたのだ!!」

と、少年の権十郎が口にのぼせて思わず叫んだことも、何度かある。

徳川将軍の世は、まさに安泰であった。

この安泰は、永久につづくことのように思われたし、また、いかなる階級の、いかなる人びとも、これをうたがわなかったといえよう。

戦場の血風を忘れきった武家は、ゆるぎなくかためられた徳川幕府の封建制度の中で、官僚化しつつあった。

徳川将軍あればこそ、の平和なのである。槍一すじにかける武勇さえもっていれば、家名も財産もいらぬ、この腕ひとつの力をもって、いくらでも立身出世をしてくれようというわけには行かない。

といって、商人にも百姓にもなれぬのが武士というものだから、

「いったん浪々の身となれば、とりかえしがつかなくなる」

つまり、今のままの家名をそっと大切に、出来得るならば複雑な政治の仕くみの中へわけ入って、甘い汁をいただこうという考え方が、ようやくそのかたちをととのえた時代ともいえる。

こういう世の中の武家にあっては、権十郎のような次男、三男に生れたもの、しかも妾腹（めかけばら）の子というものがたどる運命は、すでに生れたときから先が見えている。

ただひとつ、期待されるのは〔養子縁組〕の口であったが、

「きやつのごときものは、とうてい貰い手があるまいわえ」

父の重俊は、あきらめきっていたようだ。権十郎は十三歳の春に、徳山家につかえる給人（きゅうじん）の坂井久馬というものを、

「きさまの笑い顔が気にくわぬ!!」

と、わめいて、手づくりの樫（かし）の木刀をふるい、飛上がりざまに坂井の左肩を強打した。

老給人の骨が折れた。

同じ年の夏に、若党の原伝七が主人・重俊の用事で赤坂まで出かけ、帰って来る

と、門の前に権十郎が立ちはだかっていて、
「伝七。おれは道場へ行く。供をしろ」
と言った。
伝七は、ふふんと鼻の先で笑い「殿様の御用中でござる」と答え、さっさと門内に入った。
そのうしろから「伝七。来ぬか」と叫ぶ権十郎を振向きもせず、原伝七は行ってしまった。
その夜、風呂場で汗を流した伝七が、自分の長屋へ帰ろうとすると、頭上から四寸角ほどの材木の切れはしが落ちてきて、もろに伝七の頭へあたった。
ふらりと意識を失ないかけて倒れた伝七に、
「おい、上を向け」
声がふってきた。
はっとなり、ふりあおいだ伝七の面上へ、長屋の屋根の上に立ちはだかった権十郎の股間から、あたたかくて臭い雨がそそぎかけられたものだ。
「いかに、若さまといえども、あまりのことにございまする」

伝七の訴えをきいた用人の柴田主計が、主人へせまった。

本妻の腹から生れた長男の右近に対しては、まるで腫れものにさわるような媚態をもって「若殿、若殿――」と平つくばる家来どもも、権十郎には少しの手かげんもしない。

俗に言う旗本八万騎の中でも、禄高二千石の徳山家は、まず申分のない家柄といってよく、家来も用人以下腰元、女中などをふくめ二十余人という大世帯である。

これらの家来どもが、権十郎を軽んじるのは、いうまでもなく、彼が徳山家の当主には絶対になれぬ身の上だからだ。

彼らが、今の主人の後につかえるものは右近重朝である。右近の気に入られてさえいれば、すでに六十をこえた当主の重俊が、いつ亡くなってもよいというわけだ。

しかも重俊は、腹ちがいの次男・権十郎に冷たかった。

五十をこえたときの子でもあり、うかつにもこしらえてしまった子だというふくみがあって、家来どもの訴えをきくたびに、

「静。そちが不行届きゆえ、権めが悪さをするのじゃ。よう気をつけぬか!!」

みずから、権十郎と母の静が居住している別棟の一室へあらわれては、叱りつけ

た。

それに対し、ただひたすらに平伏し、涙声でわびをのべる母の姿を、権十郎は何度見たことであろう。

そんな母があわれでもあり、無性に腹だたしくもあった。

年をかさねるたびに、権十郎の悪たれぶりはつのるばかりとなった。

それでいて、勘当ということにもならない。二千石の体面があるからだ。権十郎の母は、つまり重俊の妾なのだから、別に妾宅でもかまえさせ、母子もろとも屋敷から引離してしまえばよいわけだが、旗本も二千石となると、実にやかましいもので、妾も屋敷内におかねばならず、目黒の下屋敷へ出かけるにも、いちいち役所へ届けを出さねばならぬ。無断の外泊などはもってのほかのことであった。

幕府は、諸大名に対する監視も苛烈をきわめたが、おのが麾下である旗本にもきびしかった。

「われらは将軍の御身をまもり、戦陣に一命を投げうつが役目」などと威張りちらし、水野十郎左衛門などという荒旗本が諸大名や町奴に喧嘩を売っていたころの威勢は、権十郎の父・重俊の少年時代をもって終りをつげていたのである。

二

いくら妾の子でも、文武の道は一通り教えこまれる。

権十郎としては〔文〕の方は、まったく駄目であったが、もう一つの方にはすぐれた天分をしめした。

〔すじ〕がよかったのである。

「まれにみる逸物、逸物――」

と、剣術の師であるところの堀内源太左衛門が大いによろこび、十歳のころから市ケ谷の道場へ通いはじめた権十郎に、みずから手をとって剣術を教えた。

修行はつらかったが、少年の権十郎にとっては道場の猛稽古が、ただひとつの生甲斐となった。

〔すじ〕がよいから上達も早い。上達が早いからおもしろくなる。

つまり権十郎の肉体や感覚は、剣術向きに出来ていたのだ。

このまま、剣客としての修行をつづけぬいたなら、徳山権十郎の人生も変ってきたかと思われるが、やがて彼は剣と別れることになる。

スポーツマンの異性に目ざめたときが危険であるように、権十郎も女性に目ざめ、剣術を捨てた。

それは後のことだが、権十郎十三歳の十二月十四日に、あの、赤穂四十七士の吉良邸討入りという大事件がおこった。

ときは、いわゆる元禄時代だ。

将軍は五代目の綱吉で、士民一般は安逸におぼれ、奢侈にながれ、華美遊惰の風が流行したという、江戸幕府もっとも華やかなりしときに、主君の仇を報じた赤穂浪士たちの評判は大変なもので、

「ああ、いまだ武士道ほろびず。まことに天晴れ、まことに痛快!!」

と、徳山重俊もしわだらけの顔に涙をうかべ、

「今夜は、武士道すたれざる痛快事に接したるよろこびを、一同に分ちたい」

というので、家族、家来一同を大広間にあつめて宴をもよおした。

「権十郎」

「はい」

「そちのまいっておる堀内道場からは、堀部安兵衛、奥田孫太夫という赤穂義士が二

名も出ておるそうな」
「はい」
「負けまいぞ、御両所に――」
末席に母と共にひかえた権十郎へも、重俊はめずらしく上機嫌な声をかけたまではよかったが、
「そうじゃ。右近と権十郎両名にて試合うてみよ」
と言い出したものだ。
「はい」
長男の右近は、じろりと軽蔑の視線を権十郎にあたえておいて、勢いよく「木太刀をもて」と、家来に命じた。
権十郎は、不安に耐えかねてまっ青になっている母を微笑で見やり、にやりと立ちあがった。
重俊のかたわらで、本妻の千子が、さも憎らしげに権十郎母子を見つめている。
千子は後妻だが、右近のほか女子二名を生み、しかも神尾宮内少輔守勝のむすめであり、莫大な持参金と共に嫁に来たものだから、重俊も少々頭が上がらぬところが

ある。

それなのに、ときのはずみで手をつけてしまった侍女の静が権十郎を生んだのだ。

謹直そのもののような重俊が、たっぷりと奥さまからあぶらをしぼられてから、侍女たちの主人を見る眼が、いくらか変ってきたようである。以来、重俊は前にもまして謹厳となり、口やかましくなった。

さて、木刀をとった兄弟は、いくつもの燭台の灯にかこまれた庭へおりた。

右近は、すでに二十歳で髭あとも濃い。

まるで大人と子供の試合であった。

それなのに、主人も家来も権十郎の敗北を見たがっている、としか思われない。

(何とまあ、むごたらしい……)

わなわなとふるえ、見るに耐えない風情をしめしているのは静と静母子のまわりにつきそっている三人ほどの侍女のみである。

「思いきり叩きのめしておしまいなさるとよいな」

と、肩の骨を折られた坂井久馬がつぶやけば、

(いっそ、撲り殺されてしまえばよいわ)

と、尿攻めにかかった原伝七は、ひそかに思っている。
「権十郎、よいか――」
右近はたすきもかけずに、だらりと木刀をさげたまま、
「早う、まいれ」と言った。
右近は、外神田の窪田甚右衛門の教えをうけていて、これもかなりつかえるという。
権十郎も、たすきをかけない。
木刀もだらりと下げたまま、つかつかと兄の眼前五間のところまで進んできて、
「よろしゅうござるか」と言う。
生意気なふるまいをするやつめ、ただちに一打ちと怒りつつ、右近が、
「来い!!」
叫んだ瞬間である。
足をとめずに進みつつあった権十郎のしなやかな軀が、ふわりと宙に浮いた。
「ああっ……」
絶叫は右近があげた。

したたかに、どこかを打たれた右近は、庭の芝に突伏して気をうしなっていた。

三

宝永五年の秋の或夜、母の静が病死をしてから十日目に、徳山権十郎は本所・石原の屋敷をぬけ出し、行方不明となった。

権十郎、ときに十九歳である。

先ず、権十郎は、本石町十軒店にある扇問屋〔駿河屋又兵衛〕方へ行った。

駿河屋は、亡母の静の実家である。

静は、又兵衛の次女に生れたが、行儀見習いの名目をもって徳山家へ奉公をした。

町家のむすめが武家に奉公をして箔をつける、というのが、そのころからの流行であって、これは次第に経済力を増大させつつあった町人たちの虚栄であったともいえる。

静が徳山家へ来て、半年目に、主人の重俊が土蔵の中で手をつけたという。

何かにつけて、

「そもそも武士たるものは……」

と説教をはじめるのが得意の、気むずかしやで口やかましい重俊にしては、やることが堂に入っている。

大身の侍が妾をもつことが、内にも外にも許容されていたころであるから、このことによってもめごとは起きなかった。静も、妊娠によってすべてをあきらめたようである。

重俊も、はじめのうちは静の寝所へはよく通ってきたものだが、権十郎が生れてから、あまり足を運ばなくなった。まして、権十郎が成長するにしたがい、手にもおえぬ所業をするようになってからは尚更のことである。

静は、権十郎が生れてからは健康をそこね、屋敷内の片隅で、いたずら小僧の権十郎にはらはらと気をもみながら、身をせまくして暮しつづけ、三十七歳の若さで死んだ。

駿河屋の当主・又兵衛は、静の実兄にあたる。

（妹も、あわれな……）

と思いもしたろうが、このようなことは世間にいくらもあることだし、何といっても妹は、二千石の旗本の子を生んだというのが、かねてからの自慢であった。だが、

又兵衛も権十郎には、ほとほと困りぬいていたのだ。
いくら妹の子でも徳山家の若さまであるから、叱りつけるわけにも行かない。
半年ほど前から、権十郎が金をせびりに来るたび、又兵衛は身をすくめていた。
悪所がよいのための金ということは、きかなくともわかる。
それとなく意見のようなものもしてみたが、
「心配するな」
一言のもとに、権十郎ははねつけてしまう。
母が死んで屋敷を出奔した権十郎が駿河屋へ向ったのも、まとまった金を手に入れるためだ。
この夜、権十郎は百五十両という大金を手につかんだ。
又兵衛と話合いの上ではない、強奪したのだ。つまり、強盗に入ったのである。
「話しても無駄と思い、このようなふるまいをしたが、許せ」
覆面もせずに駿河屋へ忍び入った権十郎が、又兵衛夫婦をしばりあげておいてから、そう言うと、そばについていた、これは覆面の侍が、
「ゆるせよ、おい」

と言った。

こやつが、鷲津平之助というものである。

堀内道場での剣術友達だ。

権十郎は、平之助によって酒の味をおぼえ、はじめて女体の神秘を知った。平之助は、二ノ丸御留守をつとめる鷲津伊織の三男坊で、権十郎より二つ年上であった。

「おれなどはなあ、兄どもが家をつげば一文の金も貰えなくなるのだ。同じ母御の腹から飛出しても先と後とでは、こんなに差別をつけられるのだから、たまったものではないな」

酒をのむ金にもつまり、気が荒れるときはこいつが一番いいのだと、平之助は言い、道場へ来ると気狂いのように木刀をふるった。

堀内道場では権十郎の方がずっと先輩である。平之助は一年ほど前に入門したばかりだが、むろん、その前には永い修行をつんできているとみえて、なかなか強かった。

二人でよく稽古もしたし、同じような境遇なので気も合う。

「権十郎さん。一度、おれについてこぬか!?」

「どこへだ？」

「どこでもよいではないか」

半年ほどたって、ふらりとさそわれた。

行った先は、赤坂裏伝馬町の比丘尼宿である。そこは赤坂御門のすぐ近くで、しかも紀伊や井伊家の中屋敷など、大名屋敷がいかめしく立ちならぶ中に、わずかな町家がある。その一隅にある比丘尼宿は、いま流行の売春宿であった。

古書に――熊野比丘尼というは紀州那智に住みて山伏を夫とし諸国を修行せしが、いつしか歌曲を業とし、拍板などをならしてうたい……遊女と伍をなすの徒、多く出来れるを――とある。

尼姿の娼婦たちは、いずれも黒の頭布を青々と剃った頭にかぶり、好みの色にそめた着物に黒の帯、手足の爪には臙脂までさして客を迎えたという。

「わは、は、は……ふるえるなよ、権十郎さん。剣術をならうよりも、わけのないことだ」

言いすてて、鷲津平之助は別室に消えた。

鼻のつかえそうな小さな部屋には、午後の陽が障子ごしにさしこんでいる。

「さあ、こちらへおじゃい」

豊満な比丘尼である。平之助が去るのを見送るや、いきなり権十郎をひきよせ、ぼってりとした唇をおしつけてきた。

ぬるりと、その比丘尼の舌が口中にさしこまれたとき、権十郎は目がくらんだ。

「おはじめてかえ。ま、うれしいこと……」

がくがくとふるえている権十郎に気づいた比丘尼が興奮してきて、あっという間に頭布をぬぎ、帯をといた。あとは、もう権十郎にとって無我夢中であった。

茫然と外へ出たとき、権十郎は、あの比丘尼が、むっちりと肥えた胸にも腹にも、そして股下にまで白粉を刷いていたのを思い出した。女は、乳首にまで臙脂をさしていたのである。

「どうだ、権十郎さん。いいものだろうが――」

肩をならべて歩きながら、平之助が言った。

権十郎は首すじまで赤くなり、うなだれながらも「うむ」と、うなずいた。

「また、来たいか？」

「うむ……」

「今度は、おぬしが金をもってこいよ」

屋敷へ帰り、権十郎は、まっしぐらに井戸端へ行き、何杯も水をあびつづけた。

中間たちが目をみはって、春とはいえ、暮れ方の肌さむさにかまわず狂ったように水をかぶる若さまを見つめていた。それから、権十郎は三度ほど平之助と比丘尼宿へ行った。

道場での稽古を少し早目に切りあげて行けばよい。屋敷でも怪しまれなかった。

土蔵の中の刀や骨董を盗み、これを平之助に托して金に替えたことも、まだ知られてはいなかったのだ。

はじめて知る官能の世界に、権十郎は、しばし何物をも忘れた。

また、土蔵へ忍びこみ、刀を二ふりほど持出して平之助にわたすと、

「ふむ。これは……」

平之助はちょっと息をのみ、

「高く売れるぞ」と言った。

この刀を売った金で、平之助が「今度は、少しおもむきを変えようではないか」などと一人前のことを言い出し、その日の昼下がりに権十郎を浅草橋北詰の船宿〔槌

屋」へ連れこんだ。

「いかほどに売れた？　あの刀は――」

権十郎が訊くと、平之助は、

「まあ、よい。ともあれ、今日は女の価も高いのだ」と笑い、

「おぬしも、もう女の軀に少しはなれたろうな。今日は、存分にいろうてやれ」

こう言って、権十郎を残し、別の部屋へ去った。やがて、女が来た。

それが女だとわかるまでに、権十郎は驚嘆と疑惑と不安の入りまじった時間をもてあましたものである。

少女は男装であった。髪は水もしたたる若衆髷にゆいあげ、縫とりも派手やかな小袖を着流し、うす化粧の細いおもてをうつむけたまま、いつまでもひそやかに、権十郎の前に身をすくめているのだ。

ややあって、権十郎が、

「おぬし、女か……？」

と、ためいきのようにもらすと、

「あい……衛門、と申しまする」

その美少年……いや美少女が、つつましやかに答えた。

権十郎が、踊子の衛門を知ったのは、この日である。踊子というのは、のちの芸妓に変化したものといえよう。三味線浄瑠璃の芸をもって、大名、武家などの宴会にはべるようになったのが、その発生である。わざと男装をさせられる踊子もあったのは、そのころの男色流行の影響とみてよい。衛門というのは妓名で、その少女の名はもよといった。もよは、もちろん処女ではなかったが、まじわりの所作は、まだ幼かった。だから、値も高かったのであろう。

歯をたてれば、熟しきらぬ果実がもつ酸味をふくんだ果汁がほとばしるような、かたくひきしまったもよの肉体は、まさに少女とよぶにふさわしかった。このとき、もよは十六歳であったそうな。

四

「お前、いつごろから、こんな業をしているのだ？」

「……一年ほど前から、でござりまする」

「十六、だと言ったな」

「あい……」
「その……お前の、父も母も、このような業に……」
「ごじゃりませぬ」
「ない？」
「父も母も、ごじゃりませぬ」
「なぜだ？」
「捨てられた子、わたくしは――」
「ふうむ……」
と、まずこのようなやりとりののちに、権十郎は、もうたまりかねてもよを抱きすくめた。
男装の魅力は、男のための衣裳が女体を圧迫するところにある。
男の肉体、顔貌のためにつくられた扮装が、女そのものの自由をうばうため、男装の女は、反って女本来のなよやかな肢体を露呈することになるのだ。
小袖の襟もとをおしひろげると、
「あ、あ……」

眉をよせ、若衆髷のほつれをふって、もよはあえいだ。
か細い軀つきで、小さな乳房のふくらみさえ痛々しい感じさえした。
それが権十郎を尚も駆りたてた。
「ゆるせ……ゆ、ゆるしてくれ」
ふてぶてしい年増の比丘尼の奔放きわまる所作に圧倒されてきた権十郎だけに、本能のおもむくまま、この少女の細い軀にいどみかかる自分に嫌悪すらおぼえつつも、
「ゆるせ。ゆる……」
はじめて女体を征服するよろこびにも燃えあがった。
権十郎にしても、鷲津平之助ほどの遊蕩をしたわけではない。比丘尼買いを何度かやったにすぎず、それもみな、権十郎自身があの、あぶらぎった比丘尼のおもちゃにされていたようなものである。
「く、苦しいか……ゆるせ」
あまりに、もよが眉をしかめてあえぐので、権十郎は絶えずあやまりながら、ぎこちない動作をつづけた。
この権十郎の初心さが、敏感な少女の知覚に通ぜぬはずはない。

そのことが終り、二人とも恥じらいの気味を見せて、衣服をつくろったわけだが、

「何を、見ている？」

思わず訊いたほどに、もよは、ちらりちらりと、しかも感情のこもったひたむきな視線を権十郎へ射つけてきた。このときのもよは、まだ四、五人の男の手でなぶられていたにすぎない。それも、大金を投じて猟奇におぼれる武家や富商が、けだもののようないどみ方をしたものである。

それだけに、もよは権十郎に対して、肉体のそれよりも先ず、心のときめきをおぼえずにはいられなかったようだ。

それに加えて……。

「権十郎さまが、あのようなあばれ若さまでなくば、もう、わたくし、放ってはおきませぬえ」

などと、徳山家の侍女たちの、みだらな話題にのぼることもめずらしくない権十郎の美貌である。顔だちが端正なのは、亡母の静ゆずりのものであった。眼も鼻も唇も、顔というものを形成するどの部分も、適度にととのい、きりりとひきしまってみえる。

剣術の修行にきたえられた体軀も、若い猟犬のようにしなやかで、しかも精悍であった。

「また、会うてくれるか？」

「あい……」

「きっとだぞ」

「はい」

晩春から秋にかけて、権十郎ともよは、船宿〔槌屋〕で、何度出合いをかさねたことか……。

けれども、何しろもよと会うためには金がかかる。それに、踊子の売春は先年に禁止されていたものだから、尚更に高値をよぶわけだ。

踊子たちは、〔七五三田組〕とか〔千歳組〕とかよばれる組に、それぞれ所属しており、組頭が、これを束ねているのだ。

はじめのうちは、鷲津平之助に、もよをよぶための手つづきをしてもらったが、権十郎も馴れてくると槌屋の主人の手を通じ、もよと出合いする方法を知り、以後は、なるべく平之助を敬遠することにした。入費がかさむからである。

「たのむ、これかぎりだ」
と、駿河屋又兵衛にたのんだり、それもたびたびとは行かなくなると、
（ええ、もうかまわぬ!!）
もよへの愛慕と自暴自棄が、歩調をそろえはじめた。
権十郎は、土蔵から種々の品々を盗み出し、売りさばくことをおぼえた。盗み出したものの中に、宗珉作の〔笄〕があった。
さすが金工の名人とよばれた宗珉の作だけに、牡丹の図柄を高彫色絵であらわしたその笄の見事さは、権十郎にもよくわかる。
「髪につけてくれ」
と権十郎は、この笄をもよに贈った。
もよは、黙って笄をおしいただいたが、この少女の胸をみたした感動は、たちまちに、彼女の両眼からあふれ出したものをみても、そのはげしさがわかろうというものだ。
母が、死んだとき、
（この屋敷におることも無用になったな）

とっさに、権十郎の心がきまった。

十九歳の若さである。ためらうより先に体が動くのは青春の特権であった。

「めいわくはかけぬ。おれ一人で何も彼も背負いこむから、平之助どのも一緒に行ってくれ。おれ一人では手がまわりかねるやも知れない」

「その、駿河屋へ盗みに入るのか？」

「十両や二十両では、とてもすまない。これからおれは、もよと共に逃げなくてはならないのだ」

「ふむ……」

「たのむ……」

「よし!!　引きうけよう。ところで、おれには？」

「むろん、半分はさしあげる」

「うむ、それできまった」

二人が駿河屋へ強盗に入ったのは、およそ、こうしたわけであったのだ。

百五十両あまりの金を二つにわけて、権十郎は、平之助と別れた。

「江戸にいて、その金をすぐにつかうなよ、権十郎さん。いかに母御の実家だとて、

何しろ大金だ、黙ってはおるまい」
「遠くへ逃げるつもりだ」
「それにしても、おぬし、顔を隠さなんだのはまずかった。忍び入ってから、なぜ急に覆面をぬいだのだ？」
「卑怯と思ってね」
「強盗に卑怯もくそもあるものか」
平之助は、何くわぬ顔で鷲津屋敷へ帰って行った。分け前の七十五両も、平之助なら、何とかうまくさばけようというものだが、いまの権十郎には、そんな暇はない。その日の夕暮れから〔槌屋〕によびよせておいたもよを連れ出し、徳山権十郎は江戸をぬけ出すつもりであった。

五

もよを残して忍び出た船宿の一室へ、権十郎が忍び帰ったとき、
「あっ……」
権十郎を待っていたものは、もよではなかった。奉行所の同心が二人、権十郎を縛

るために待ちうけていたのだ。

もよは、すでにとらえられ、どこかへ引立てられてしまった後であった。

このあたりが、平之助にしても権十郎にしても、まだまだ幼稚なところであって、槌屋では、

「どうも怪しい」

後難をおそれ、主人と女房が相談したあげく、思いきってその夜に、そのすじへ届け出たものである。権十郎は、役人の調べにも頑として口を割らなかった。

しかし、それではすまない。

町民や無宿の無頼漢とはことなり、徳山重俊のせがれという身分が、権十郎の口からきかなくとも、二、三日のうちには、おのずとわかってしまうのが道理である。

鷲津平之助もとらえられた。ところが、二人とも無罪となったのだ。金がものを言ったわけである。

「おのれ、おのれ――ようも、このわしに……権現様（家康）以来の名誉の家柄に泥をぬりおったな!!」

土蔵の中のものが、かなり消えていることもわかった。

徳山重俊は青くなったり赤くなったり、地団太を踏んで激怒したが、このまま権十郎を公の罪人にしてしまっては、家名に傷がつくと考えたのは当然のことで、

「おのれ、おのれ……」

歯ぎしりをしながらも、すぐさま賄賂の手くばりに取りかかった。これらのことは、重俊にとって容易なことである。御使番、銃砲頭などの要職にもつき、一時は、火付盗賊改方（特別警察）の頭をつとめてもおり、幕府にも名の通った旗本であるし、交際もひろい。万事うまくいったが、このために重俊がばらまいた金は、千二百両におよんだという。

重俊は、権十郎をもらいうけ、我が屋敷に連れ帰ると、

「おのれ、おのれ!!　おのれというやつは――」

重俊は、長押の槍をつかみとり、その柄をもって、さんざんに撲りつけ、石突きで権十郎の五体を突きまくった。

手向いは出来ない。

半死半生の体となって庭先に倒れた権十郎は、そのまま急造された座敷牢へ投げこまれた。

「一生、入っておれい」

重俊は、長男の右近にも、

「わしが死に、そちの代となってからも、権めを出すな」

と命じた。

右近はもちろん、家来どもも、これには大賛成であった。

半年後、権十郎は牢を破り、脱走をした。今度は、どこへ隠れたものか、さっぱりわからぬ。

重俊は、肚をきめた。すなわち、権十郎を勘当したのである。

権十郎は徳山家の戸籍から消された。つまり〔無宿者〕となったわけだ。

これで、権十郎が何をしようとも、徳山家には関係がない。

「馬鹿ものめが――」

重俊は舌うちをした。

一年たった。権十郎は、依然として行方不明であった。

それにしても、この年、すなわち宝永七年の秋となって、にわかに、徳山重俊が権十郎の勘当を取消しにしたのは、どういうわけか――。

ずいぶんと勝手なものだが、役所への届けにも、またもや金がふりまかれ、万事うまくはこんだのである。

それは、こういうわけであった。この一年の間に、徳山家の長男・右近が、にわかに病弱となった。病気は労咳である。今でいう肺結核だ。

江戸城・奥御医師をつとめる半井道伯に高い診察料をはらい、診断を乞うと、

「明年の夏までありましょう」

と、道伯が重俊に言った。

重俊は、うなった。

二女ともに嫁いでしまっているし、右近に死なれては、屋敷内に一人の子もいなくなる。

右近の病状を、妻の千子に言いきかせたのもいけなかった。

「ま……」

驚愕した千子は、それから四日後に、廊下を歩んでいて卒倒した。今でいう狭心症でもあったのか……。倒れて十三日目に千子は世を去った。五十歳である。

徳山重俊が、権十郎勘当の取消しをおこなったのは、この直後のことである。

翌正徳元年の初夏に、徳山家へ意外な知らせが舞いこんできた。この知らせは、京都からきた。京に、木村和助というものがいる。

木村は、重俊の姪を妻にしていて、これも百五十石の旗本であった。

三年前から京都在勤となり、淀川の船支配という役目につき、二条河原町に屋敷をかまえている。この木村和助が、

「権十郎殿を見つけまいた」

と、知らせてきたのである。

勘当を取消しにして以来、徳山重俊は、親類はむろんのこと、諸方の親しい知人たちに、

「権十郎を見かけなば、何ぶんにもよろしゅう――」

と、ふれまわっておいたのだ。

木村和助にも、

「京、大坂のあたりには、ことに立ちまわることもあると存じ、わけても気にかけられ、権十郎を、もしも見つけなば、きやつめには知らさぬよう、こなたへはお知らせ願いたし」との手紙も出し、かさねて、うまく権十郎を足どめさせておいてくれとも

頼んであった。

「そのための入用の金子なれば、いかほどにても……」

送りとどけようというわけだ。

そのころの武士が、いかに家名の存続に必死であったかは、このことを見ても、わかろうというものである。

「先ず、これでよい」

徳山重俊は、用人の柴田主計（かずえ）に言った。

「はい……」

柴田用人は、主人の、めっきりと老い果てた風貌（ふうぼう）にあわれをもよおすと同時に、

（権十郎さまが御当主となられたあかつきには、このわしを、何とごらんなされよう）

冷汗をかいている。

これは、柴田用人のみではない。

まさか、権十郎が次代の主人になろうとは思いもしなかった家来どもは、みな、あわてふためいている。

これを裏書するかのように、八月十二日の未明、右近重朝が半井道伯の診断の通り、息をひきとった。

六

徳山権十郎が、親類の木村和助を京都へたずねるまでの二年間を、どこで何をしてすごしてきたか……。

いうまでもあるまい。落ちるところまで落ちたのである。武士と農町民とにかかわらず、それが〔無宿者〕の運命であった。それほどに、むかしは、戸籍というものが大切にされもし、人間にとって欠くべからざる人生の背景をなしていたのだ。

闇から闇へ、権十郎は、ひそみ生きた。

まだ江戸にいたころは、本郷の根津権現門前の料理茶屋の束ねをしている〔赤大黒の甚佐〕というものの世話をうけた。

〔赤大黒〕は、いうところの顔役である。近辺の私娼窟にもにらみをきかせ、手につかむ利権も大きい。

こういうやつの下にいて暮すということが、どんな役目を果さなくてはならなくな

ったか、これはもう歴然たるものだ。

つまり用心棒、つまり悪の世界において、堀内源太左衛門直伝の一刀流にものをいわせなくてはならない、というわけであった。

人を殺したことはなかったが、権十郎も、ずいぶん下落をしたものである。

それでいて、尚も、

「もよは、どこに……」

権十郎は、必死になって捜しつづけた。

だが、わからない。

折も悪く、権十郎が座敷牢へ入っている間に、旗本が踊子売春に狂いだし目にあまることが多くなったため、幕府は、これに対し、きびしい弾圧をくわえた。

踊子たちが、江戸市中からいっせいに姿を消したのも、このためである。

村松町にあった〔七五三田組〕が、もよの組であったが、権十郎がたずねて行ってみても、もぬけの空になっている。

踊子たちの大半が、西へ行ったらしいという情報を耳にしたとき、権十郎は、江戸を離れる決意をした。この間に、権十郎は、女と酒に荒れつくした。

もはや、鷲津平之助どころのさわぎではない。

東海道を西へ向う途中にも、種々雑多な業をやってのけたものだ。

そのころ駿河一帯を荒しまわっていた盗賊で、赤池の大五郎というのがいた。

権十郎は、こやつの子分にまでなり、押込みの手伝いをさえやったものである。

（どうなっても、かまわぬ。おれはただ、あの……もよだけを捜すことに、この命をかけているのだものな）

どんな女の軀を抱いてみても、酔うことはできない。ことにもよのような細そりとした軀つきの女には絶対に手をつけなかった。あの、はじめて権十郎を〔男〕にした豊満な比丘尼、あのような脂ぎった女だけをえらび、権十郎は欲望をみたした。

赤池の大五郎のもとを去ったのは、次のようなわけがある。

あるとき、大五郎はじめ十余人で、岡部の宿の手前にある川原在の庄屋の家を襲ったことがあった。みんなで、土蔵の中のものをひき出している最中に、子分の一人が、庄屋の末娘を犯そうとした。まだ十五か六の少女で、それは、あまりにも、もよをほうふつとさせた。

ものも言わずに、権十郎が、そやつを抜討ちに斬って落した。

「な、なにをしやがるのだ!!」
「あぶれ浪人め、親分の恩を忘れやがったか!!」
ひろい土間に立ち、権十郎は、
「不服か――それなら斬ってこい」と言った。
「権之郎――」と、親分の大五郎が、権十郎の変名で声をかけ、
「しゃらくせえまねをしたな。ゆるさねえぞ」
「勝手にせい」
「やっつけろ!!」
大五郎が叫ぶと、前後左右から四人の子分たちが喚き声をあげて権十郎へ殺到した。
「一人も殺さなんだが、どやつもみな、片足を斬り落してくれたわ」
と、後年になって権十郎が親しい知人に、このときのことを語っている。
あざやかな権十郎の手練が、まざまざと感じられるわけだが、盗賊たちも片足を落された四人の仲間をかついで、逃げるのには骨を折ったことであろう。
まず、こうしたわけであった。

正徳元年の春に、権十郎が京の地をふむまでの生活が、どのようなものであったかは容易に想像がつこうというものだ。

木村和助をたずねたのも、むろん、金の無心である。

「とっとと帰りめされ!!」

木村に怒鳴られるのを覚悟で、もし怒鳴られたら、こちらも考えるところがあるという、ふてぶてしい気持でおとずれたのだが、

「これは権十郎殿。ようもわせられた」

意外、大歓迎なのである。

すでに、木村和助のもとへは〔権十郎勘当取消し〕の知らせが重俊からとどいている。

権十郎は、これを知るよしもない。

木村は何も彼もおしかくしておいて「ゆるりと逗留なされよ」と、親切に言った。

すぐに、秘密の使いとして若党が江戸へ飛ぶ。

「金がいくらかかってもよい、権十郎をひきとめおかるるよう、たのみ入る」と、重俊が書状にそえ、金百両を木村にとどけてよこした。

「金子を少々さしあげよう」
木村が、一両、二両と、小きざみに小遣いをくれた。
「すみませぬな」
「衣服もととのえねばなり申さぬな」
「いたみ入ります」
権十郎も、もう二十二歳になっている。
しかも、この二年間の苦労と体験が、江戸にいたころの木村和助が見た権十郎の風貌とはまったく違った権十郎にしてしまっていた。
「いやもう、まことにたくましき男の子になられたわい」
と、木村が妻女（つまり権十郎の従妹）にもらしたそうだ。ともかくも木村家の庇護によって黒の着流しに茶の帯をしめ、こしらえも立派な大小をさし、ぶらりぶらりと日毎に京の町をぶらつく徳山権十郎となった。
「これこれのわけで――」と、木村から役所にも、そっと届出てあるから、白昼に大手をふっても、とがめられることはない。
（木村殿は顔のきいたお方なのだな）

権十郎に、のびのびとした明け暮れが到来した。

（ありがたいことだ。親切な木村殿……）

この二年間の自分をふり返ってみて、権十郎は木村和助のあたたかい取りなしに涙ぐみさえした。このあたりが権十郎の素直さでもあったのだろう。

もしも、あと一年、権十郎が悪の世界に立ち迷っていたとしたら、後年の権十郎はなかったかも知れぬ。

（金子も惜しみなく、おれにあたえてくれるし……すまぬな……）

惜しみなくあたえる筈だ。木村和助のふところは痛まぬのだし、江戸の徳山重俊からは「せがれが、いかいお世話に――」というので、たんまりと礼金も入ってくる。

「権十郎殿。金子はいかが？」

となるのも当然といえよう。

それはともかく、権十郎は、はじめて見る京の都に酔った。

比叡、鞍馬、東山、西山の山脈にかこまれ、清らかな鴨川の流れを中心に形成された優雅沈着な皇都の風物は、

（江戸とは、まったく違うなあ）

発剌としてはいても、やたらに騒がしい江戸のそれとは、まったくおもむきを異にしているのだ。

酒も違う。女も違う。

間もなく、権十郎は、祇園社の境内にある茶店の女主人で、お梶という女と親しくなった。

お梶は未亡人で、お百合という小さな娘がいる。年は二十四歳であったから、権十郎より二つ年長というわけで、

「権さま、権さま……」

と、お梶の寵愛は日毎にふかまるばかりとなった。

お梶は年増女のみなぎるような血の色を肌にあふれさせていた。同じ豊満でも、股の下まで白粉をぬったあのときの比丘尼とは、わけが違う。どこが違うかというと〔健康〕が違うのだ。白粉も紅も、お梶には無用のものといえよう。

「久しぶりの、あそびごとゆえ、何やら、もう無我夢中になってしまいそうな……」

と、お梶は熟しきった肢体を権十郎におしつけながら、そんなことを言った。

それも半年の間のことで、突然にお梶は娘をつれ、京の地から消えた。

戸が閉ざされた茶店の前で、権十郎は茫然と立ちつくした。
お梶によって、もよを忘れようとつとめ、忘れかけもした権十郎なのである。
（そうか……）
今更に、思いあたることがあった。
いつであったか、お梶が、
「権さまと、わたくしとのあそびごとは、どこまでも、あそびごとゆえ、たがいに、ふかくなってしもうてはなりませぬえ」
こう言ったことがある。
そのときの、お梶の眸の底には、若い権十郎が抗しきれぬ女の威厳すらもただよっていたのだ。
（ついに、それがまことととなったのか……）
がらんと、権十郎の胸の中が空洞になった。
またも、酒びたりである。
折りも折りであった。
江戸の徳山家から、用人の柴田主計ほか若党三名が、京へ馳せのぼってきた。

「ははっ――」
柴田用人は白髪頭をひれ伏せて、
「お迎えに参上つかまつりました」
必死の声である。
権十郎は呆気にとられた。
これが、少年の自分をいじめた意地悪の用人なのか……。
「殿さま、御重態にござりまする」
「それがどうした？」
「はっ……」
「兄上というものが、ちゃんとついておるではないか。ふン、ふふン……」
「は――御長男重朝さまには、すでに御他界……」
「何――」
「権十郎さま……」
「よめたぞ」
「え――？」

「跡つぎがほしいなら、どこからでもよい、養子をとれと父上に申せ。金次第で何事も通る世の中じゃ、父上は、そのことをようわきまえておられるわ。何もいまさら、このおれを……」

「お待ち下されましょう。先ず。この御手紙を――」

「何、手紙……」

うけとってひらくと、父・重俊から権十郎へあてたものであった。

書面には只一行、ふるえをおびた筆で「ゆるせ、権十郎」とあるのみである。

「む……」

権十郎は、うなった。

(あれほど、いかめしい冷やかな父上が……む……それほどまでに、血すじのものに家をつがせたいというのか……)

現代の若者には、こうした感覚は通用しまい。子がなくとも我家は、われ一代のみで消えるとも、別に世界に異状はあるまいという時代であるからだ。

家族、家庭というものが国家の根元となっていたむかしのころとは違うのである。

それとも、違ってはいないと叫ぶ若者ありや……。

七

それから、三十五年の歳月が去った。

権十郎は、亡父の名をおそい、徳山五兵衛秀栄と名のっている。これより、五兵衛の名をもって書きすすめよう。

三十五年という年月は、徳山五兵衛に変化をもたらしたばかりでなく、時代のながれをも変えずにはおかなかった。

将軍は、五代・綱吉から、家宣、家継、吉宗を経て、九代・家重の世となったばかりである。

延享三年（西暦一七四六年）に、五兵衛は五十七歳になっていた。

このとき、五兵衛は、徳山家の立派な当主になりきっており、治郎右衛門という三十五歳になる息子をもち、男女とりまぜ三人の孫もいる。

役目にもついていた。

〔火付盗賊改方〕の頭をつとめていたのだ。

この役目は、およそ百年も前の寛文年間に幕府の職名の一つとなったものである。

江戸内外の火災予防、盗賊の逮捕なぞにはたらくわけだが、奉行所とは別に、江戸のみか、場合によっては諸国のどこへでも出張って行き役目を遂行できるという機動性をもっていた。

つまり、一種の特殊警察のかたちにあるものだが、ともすれば奉行所よりも一段下がった役目だと見られ、

「町奉行は檜舞台、盗賊改方は乞食芝居だ」

などとよばれ、奉行所からは事々に差別をつけられてもいる。

「ふン。わしが盗賊改メとはのう……」

就任したとき、五兵衛が息子に言った。

「やりにくい御役目だわえ」

そのとき、五兵衛の口辺に、ちらりと複雑な思いをしのばせた苦笑がうかんだ。

息子は、むろん、その苦笑の意味の表皮だけを考えて、

「御苦労にございますな」と、言った。

さて——このあたりで、三十五年間の徳山権十郎……いや五兵衛について、のべておかねばなるまい。

あのとき、五兵衛は「ゆるせ」と記された重病中の父の手紙の一言に、かなり心をうごかされた。（あの父上が、見得も体裁もなく、おれに、ゆるせと申された……）

それに加えて、

「実はな、権十郎どの――」と、木村和助が、すべてを語ってきかせるにおよんで、

「なるほど……木村殿は、いかい金もちだと思い、おどろいておりましたが……左様か……父が、金を……」

と五兵衛も、はじめて納得がいったものだ。

またそれに加えて、

（京に、お梶もいなくなった。そして、もよも、とうてい見つけ出すことはできないなあ）

一種の虚脱状態にあった五兵衛を、

「さ、権十郎さま。一時も早う」

柴田用人は血相を変え、若党二人や木村和助ともども、どしどしと旅仕度をととのえ、駕籠に五兵衛をおしこめ、

「江戸へ早う、早う……」

飛立つように京を発した。

（どうなとしろ）

五兵衛も、駕籠にゆられつづける道中に、お梶ともよのおもかげのみを追いつつ、江戸へ向った。

駕籠をとりまく三人の家来は、万一、若さまを逃がしてはと、目を血走らせていた。

江戸へ到着した。本所の屋敷へ入ると、

「へへっ……」

家来も侍女も、門から玄関にかけてひれ伏し、中には、顔をあげて五兵衛を見ることもできないやつもいる。例の給人・坂井老人だの、若党の原伝七のごとき連中だ。

侍女たちはともかく、男の家来は、みんな五兵衛を馬鹿にして、いろいろと怪しからぬ言動をやってきている。まさか、五兵衛が当主になろうとは思いもせず、まさか長男の右近さまが死ぬとは考えもしなかったわけだ。それからはもう何かにつけて「若さま、若さま――」で、家来どもの媚態は必死なものとなった。

父の重俊は、病みおとろえ、床についていた。

「只今もどりました」
五兵衛が挨拶すると、重俊は、またも「ゆるせ」と言った。
「権十郎……わしは、身勝手にすぎたわえ……」
と、弱々しい声で反省の言葉をもらすのだ。
翌正徳三年の三月三日に、父の重俊は七十五歳をもって死んだ。五兵衛は、ときに二十四歳である。すでに、このとき家督相続を終え、権十郎から父の名の五兵衛を継いだ息子に、
「たのみがある」
と、重俊が言出したのは、死の前夜である。
病間には、父子二人のみであった。
「せがれよ。わしが死したるのち、金百両をとどけてもらいたい」
「どこへでございます？」
「内密にじゃぞ」
「は……」
「神田鍋町に、和久井屋藤助と申す白粉問屋がある」

「おしろい……」
「そこへまいり、金を主人、藤助に……しかとよいか、しかとわたしてくれい」
「それだけで……？」
「それだけじゃ」
重俊は眼をとじたが、やがてうっすらと笑い、
「そち、あれから大分に世の中を見てまいったようだの？」
「は――」
「かくすな。面つきにあらわれておる」
「……」
「女の苦労もつんだと見ゆるわえ」
五兵衛は思わず眼をみはった。謹厳そのものので、しかも癇癖のつよい父の言葉にしては、異様なものであったからだ。
「ふ、ふ、ふ……」
重俊は、またも笑い、
「どんな女と、どのようなことをしてまいったのか、語ってきかせよ」

「いや、それは……」
「言えぬか」
「……」
「いや、言うべきことでもない。男は、おのれがいつくしんだる女のことを他人に語るものではないのじゃ」
「は――」
「わかるかな？」
「はあ……？」
「わしが金をとどけるにしろ、跡つぎのそちにまで、その理由を語らぬ心が、わかるかと言うておる」
五兵衛は、はっとした。
父の葬儀が終ってから、五兵衛みずから供を連れずに編笠をかぶり、鍋町の和久井屋をたずね、主人の藤助に金百両を手わたした。
藤助は六十に近い、しっかりとした顔だちの老人で、
「たしかにお受けいたしまする。この金子は私より別のものの手におわたしいたすも

のにござります。このことだけをおふくみおき下されまするよう……」と、ひれ伏した。

「わかった」五兵衛も、あっさりとこたえ、すぐに和久井屋を出た。

本所の屋敷へ戻って行く道すがらに、

（父上には、どこかに隠し女の生んだ子が、一人や二人、おるやも知れぬな）

ふっと、そう思い至ったとき、我にもなく五兵衛は、すでに世を去った重俊へ、たまらないほどの愛情をおぼえた。

重俊は、死ぬ前に病床から指揮をして、親類のものの中で心きいた人々をあつめ、思いきり金をまき、五兵衛の将来のために気をくばった。このため、五兵衛は数々の役目にもつき、その後は、五兵衛自身のはたらきによって本所奉行、御使番、御先鉄砲頭、西ノ丸御持筒頭などを歴任し、三十年の間に七百石の加増をうけ、合せて二千七百石の大身旗本となった。

幕府でも羽ぶりのよい藤枝若狭守という四千石の旗本の二女・勢以と結婚したのも、五兵衛に幸いをしたというべきであろう。

何しろ、武家の女としての教養百般に通じ、小太刀と薙刀の名手だという勢以を妻

にしたのだ。新婚のころ、夜の床で、五兵衛が新妻の寝衣をはぎとろうとすると、

「何をなされます!!」

と、勢以に叱られた。男と女は互いの裸身をすりよせてむつみ合うものとばかり思っていた五兵衛は、ひやりと首をすくめたものだ。

それでも、間もなく長男・治郎右衛門が生れた。八代将軍・吉宗のころは、ようやく幕府にも財政危機がやってきて、吉宗は、みずから先頭に立ち〔倹約政策〕をもって、危機をのりこえようとした。

このころになると、商人の力はますます増大し、幕府も富豪と手をむすんで、新田の開発などにも町人の投資をゆるしている。〔財政〕を中心とする政治機構がととのえられた。

武士は、いよいよ官僚化していった。

この中にあって、徳山五兵衛が順調に出世コースを進んだのも、やはり放浪時代に得た体験が物を言ったのであろう。世の中のしくみと人心を読む力が期せずしてそなわり、五兵衛は官僚としても優秀な人物になっていったのである。

この間に、次のようなことがあった。

五兵衛、三十五歳の春のことだが、まだ、京都に在勤していた木村和助から、分厚い書状がとどいた。この手紙を読んで数日してから、

「ちかごろ軀の工合がよろしくない。有馬へでも湯治に行きたい」と、五兵衛が言出した。

ちょうど閑職にあったので、届けを出し、三カ月ほど有馬の湯へ行き、江戸を留守にしたものである。

有馬――いうまでもなく、今の兵庫県・有馬温泉である。供は、わずかに若党一人のみであった。

もともと誰の目から見ても、健康を害しているとは思えなかった五兵衛なのだが、湯治から帰ると、以前にも増して元気がよくなった。

「いかがでござりました!?　御湯治は――」

家来の柴田間喜太がきいた。間喜太は亡父・主計の跡をつぎ、用人をつとめている。

「うむ。京で、昔の知り人に会うて、なつかしゅう思った」

五兵衛は、このとき、にんまりと笑った。

それは、顔中が照り輝くような笑いであった。供の若党は、
「殿さまは、よくお忍びで京へ行かれた」
と、同僚にもらした。
ここで、五十七歳の五兵衛、すなわち〔火付盗賊改メ〕に就任した五兵衛にもどりたいと思う。

八

就任以来、徳山五兵衛は、手落ちもないかわり、情熱をかたむけて役目に没頭するということもなかった。
「徳山殿も気の毒にな」
「やりにくい御役目でいて、そのくせ上からは継子あつかいにされるしのう」
などと、五兵衛の知人たちの同情の声もきこえた。奉行所から差別をつけられることは、いきおい盗賊改方の警吏たちの心に劣等感と反撥と怠惰をうえつけることになる。
そのくせ、無理にも手柄をたてようというあせりと功名心が一緒になり、見当ちが

いの犯人をとらえたり、悪質の手先などとむすんで賄賂をうけとり、逆に奉行所へ引立てられて行くものも出てくる。

五兵衛にしても、

「先ず事なくつとめておけばよい」

という程度の考え方で、前任者の小浜平衛門も、

「二年がよいところじゃ。おそくも、そのころには交替があろうから――」

となぐさめてくれたものだ。

だが、就任後数カ月にして、五兵衛は厭でも活躍せざるを得ないことになった。

この年の八月二十一日に、遠州・見付在の庄屋で三右衛門というものが、江戸の町奉行所へ訴え出た。

三河・遠江・駿河など東海の地を荒しまわっている大盗賊・日本左衛門のため、被害が続出するのにたまりかね、訴え出たものであった。

このうわさは、江戸にも早くからつたわっていたものだが、封建の世にあっては、諸大名それぞれに領地をおさめているわけだから、幕府直属の役人が手をつけることはならない。

しかし、直接に訴え出られたとあれば話は別だ。こうした場合、機動性をもつ〔火付盗賊改方〕に命が下るのも、また当然といえよう。

日本左衛門は、もと尾州家七里役所にいた足軽・友右衛門の子で、のちに身をもちくずし、三十余人の手下と共に暴れまわる大泥棒となった。本名を浜島庄兵衛といったそうだが〔日本左衛門〕と名のり、日本一の泥棒だと誇るだけあって、やることもすさまじい。

先頃も、駿府（静岡市）城下の豪商へ夜盗に入ったときなどは、ちょうど夜まわりの役人に見つかってしまったが、

「かまわぬから、蹴散らせ、蹴散らせ」

と、日本左衛門は悠々として表通りにすえた床几にうちかけ、煙草を吸いながら、手下と役人の斬合いをながめていたという。どうにも手がつけられないのだ。江戸へ訴えに来た庄屋も、もちろん被害者であって、

「日本左衛門一味のものは、か、必ず、引上げて行きまするときに、女どもにわるさをいたすのでござりまする。わ、私の、十六と十八になる二人の娘も、あわれや、とうとう……」

涙と共に語った。このことを耳にしたとき、五兵衛の顔色が変った。

「よし。わしも出張るぞ」

異例である。普通なら部下を派遣するだけでよいのだ。

「今にみよ、きっと引捕えてくれるわ」

御頭の異常な緊張ぶりに、部下のものも、少々気をのまれたほどであった。

五兵衛は、腕利きの与力・堀田十次郎や同心の磯野源右衛門ほか二十名をしたがえ、九月十二日に江戸を出発した。この前に、五兵衛は、ひそかに事前工作をおこなっている。

先に帰した庄屋の三右衛門には——江戸の奉行所へ訴えても、かくべつ力を入れて、これをおとりあげになった様子もない、がっかりして帰って来たというわさを近隣へひろめさせておいた。

次いで、非人頭の車善七をよび、

「たのむぞ」

非人数名をも先発させた。非人を探偵につかうようになったのは、つい先ごろのことである。彼らが土地土地の無頼の群へまぎれこみ、または諸方をうろつき流言をは

なち、同時に探索をおこなうにうってつけであることは言うをまたない。部下たちは新任早々の五兵衛の、水ぎわだった処置の速さに舌をまいた。こういうことは、みな、若いころの体験が、おのずと出てくるのであって、

「きっと捕えてみせる」という自信も、そうした裏づけがあったからであろう。

五兵衛は、遠州・掛川と見付の両宿の間にある袋井の宿場に捜査本部をおいた。

といっても、表向きは、岡山藩士・大沢甚太夫一行ということになっている。

三日目に先発した非人の一人から情報が入った。見付宿の手前にある〔みかの村〕に女をかこっている天竜の金兵衛なるものが、日本左衛門一味だということが知れたのである。

盗賊どもは、このあたり一帯の警察力を馬鹿にしきっていて、白昼でも堂々と町中や村々を歩いたものらしい。まさか、江戸から五兵衛のような利けものが出張って来ようとは思ってもみなかったのだ。庄屋や非人の流言も、功を奏したというべきであろう。

二日後の夕暮れに、同心・辻駒次郎が同心・手先七名と共に、みかの村の外れにある橋のたもとで、金兵衛を見事とらえた。

このとき、手先二名は金兵衛の脇差をうけて即死。辻同心も左の指二本を切飛ばされたが、

「そやつを殺しては、すべてをあきらめねばならぬ。必ず引っ捕えよ」

という五兵衛の厳命があったので、大乱闘となったものである。

辻同心は、十手を金兵衛の鼻へ投当てて、組みつき、ようやくに捕えたのだ。

五兵衛は、天竜の金兵衛を袋井・本陣の土蔵へおしこめ、

「わしがやる」

みずから棍棒をとり、拷問にかけた。

「木ッ端役人め。やれるものならやってみろ」

と、金兵衛は威張った。

三十四、五にもなろうか、色の白い、きりりとした美男なのである。

五兵衛は、その顔を見て、

(どこかで見たような……)と思った。

それも一瞬のことである。

「白髪頭の老人の腕で泥を吐かせようというのじゃ。きさまも今申した言葉を忘れず

に踏ん張って見よ」

五兵衛は、こう言って棍棒をとり直した。

棍棒で撲ったところで泥など吐きはすまいと、部下の連中は思いこんでいたらしいが、五兵衛は、およそ一刻（二時間）のうちに、泥を吐かせてしまった。別に力を入れて棒をふるっているようには見えないのだが、打ちどこが違うのだ。ぐいと突く突きどころも違う。急所を心得きっているというだけではすまされない責め方を五兵衛は知っているのである。

単に、本所の旗本・徳山五兵衛を有数な〔能吏〕だとしか見ていなかった部下のものたちは、

「お若いころには、かなり御修行なされたと見えるな」

あとで、舌をまいたという。

「よう、こらえたのう。よし、縄をといてやるぞ」

五兵衛は、ぐったりとのびている天竜の金兵衛に言った。金兵衛は、明夜に、見付宿・万右衛門方で、日本左衛門が〔夜通し博奕〕をもよおすことを白状におよんだのである。たちまちに、水も洩らさぬ指令を五兵衛が下した。

明け方近くなり、ひとねむりしようと自分の部屋へ引きとり五兵衛が床へ入りかけると、与力の堀田が金兵衛の脇差をもって入って来た。

「こしらえがなかなかに立派でございます。それに、刀につけてある、その笄の細工がまことに見事で……その笄は、金兵衛めが手向いいたしましたるとき、懐中にぬきとっておりましたものでございます」

「ふむ……」

堀田が引下がってから、五兵衛は脇差をとりあげ、抜いて見ようとして、ぎょっとなった。

（こ、これは……）

脇差にはめずらしく、鐔と鞘の栗形の間に笄がはめられてある。

笄は、男女ともに髪をかきあげるための用具で、女は、これを髪かざりにもしている。武士の大刀に笄がつけてあるのは珍しくないことだが、泥棒の脇差についているのは可笑しい。いや、可笑しいとだけではすまされなかった。五兵衛が権十郎時代の、およそ四十年も前に、屋敷の土蔵から遊蕩費捻出のため盗み出した品々の中に、宗珉作の〔牡丹図の笄〕があった。この笄を、あの踊子のもよにやったことは、四十

年後の今といえども忘れてはいない。

天竜の金兵衛の脇差についていた笄は、まさに、あの笄そのものであったのだ。

五兵衛は土蔵へ駈け向った。

土蔵の中で、天竜の金兵衛は死んでいた。

「や――」

土蔵の外には見張りのものがいたわけだが、金兵衛は、土蔵の隅から鎌を見つけ出し、これで喉をかき切ったのである。見張りの者は「うめき声は絶えずしていたので、それと気づかず、声が絶えたことは知っておりましたが、まさかに、このような……」と言った。

白状をしたあとで、金兵衛が仲間を裏切った自分を責め、自殺したことは明確であった。

「どっちみち、はりつけになるやつよ」

などと、同心たちは言合って事もなげな様子である。五兵衛だけが、凝然と金兵衛の死顔を見つめ、立ちつくしたままであった。

九

その夜、見付宿の外れにある万右衛門方を取巻いた捕方は五十余名にのぼった。このうち三十余名は、袋井と掛川の両宿から出させた問屋の人夫で、いずれも屈強のものばかりである。

雨もよいの空で、月はなかった。

亥の刻もまわったころ、五十余名の捕方が地の底から湧いて出たように万右衛門宅をひたひたと取りかこんだ。

家の裏手は竹藪がつづいている。

「それ――」

用意がととのうと、五兵衛が低く命じた。

すぐさま、家のまわりに篝火(かがりび)が燃えはじめる。

万右衛門の家からもれていた灯(あかり)がぱっと消えた。捕方は戸締りを打ちこわして、いっせいに踏込んだ。あたりいちめんに、たちまち、すさまじい争闘がくりひろげられた。

博奕開帳をしていた大盗一味は、日本左衛門ほか十一名である。

「木ッ端役人め、性懲りもなくあらわれたか。かまわぬから蹴散らしてしまえ！」

日本左衛門がわめくと、手下のものどもは脇差をふるって斬りこんで来た。

五兵衛は、ひとり、裏手の納屋のあたりに立ち指揮にあたっていたが、突然、納屋の向うの壁が内側から破られ、躍り出して来た大きな人影がある。

横手から、これに飛びかかった同心の境万蔵というものが、

「神妙にせい」

うしろから飛びつくのを事もなげに振払い、その巨漢は一刀のもとに、境を斬倒した。

「日本左衛門、待てい」

五兵衛は、すかさず馳せ寄り、部下のものに「わしが引捕えるから退いておれ」と言った。

日本左衛門は、にたにたと、この勇ましい白髪の老役人を見やって、

「もはやあの世へ行っても惜しくはないな」

と、余裕たっぷりに、五兵衛をからかった。

このとき、日本左衛門は二十九歳で、鮫鞘に金覆輪の大脇差をさし、橘の大紋をつ

けた琥珀檳榔子の小袖を身にまとっていた。まるで芝居気どりの扮装である。

五兵衛は、六尺棒をもって立向った。

ぱっ、ぱっと二人の影が入り乱れ、また飛びはなれたとき、日本左衛門の呼吸が荒くなった。

声もたてずに五兵衛が殺到した。

「たあっ!!」

大盗は、五兵衛の六尺棒を二つに切飛ばし、ななめに飛んで竹藪へころげ込んだが、同時に、五兵衛が身をしずめて抜打った一刀を軀のどこかに受けた。

「手負いじゃ。追え!!」

と、五兵衛が叫んだ。間髪を入れずに捕方が竹藪へ駈けこんだが、日本左衛門は魔神のような素早さで逃去った。

「おのれ――」

五兵衛は口惜しがった。

この夜、日本左衛門以外の一味は、すべて捕えられた。そしてまた翌延享四年正月七日に、日本左衛門は、京都町奉行永井丹波守の役宅へ自首して出たのである。

親殺し主殺しなどの逆罪のほかには、日本全国への手配はないのだが、天下未曾有の大泥棒とあって、日本左衛門の人相書が全国へまわったため、ついにあきらめ、いさぎよく自首をしたというのだ。

このとき、日本左衛門いわく、

「見付宿にて、御役人の頭と見ゆるお方に、この股を斬られ、傷所がいつまでも癒らず、歩行も思うにまかせませぬ。盗賊と申すものは、お上の御威光よりも、おのれの手傷に心弱きものでござりまして……」

日本左衛門以下一味の処刑が終るころには、徳山五兵衛の名が天下にひろまった。

五兵衛は、処刑の前に、白輪の伝右衛門という老盗賊を差し向いで調べ、そのときに、あの土蔵で自殺をした天竜の金兵衛について問うたが、

「わっし共の掟は、身の上ばなしをやらねえことでござります」

と、伝右衛門は苦笑した。

「もっともである。では、この笄に見おぼえはないか？」

五兵衛が金兵衛の脇差についていたという〔牡丹図笄〕を見せると、

「そりゃァ、金兵衛が自慢のものでございました」

「では、金兵衛所持の品に間違いないな」
「へえ。なんでも、死んだ母親の形見の品だとか申しておりましたが……」
「死んだ母親の……」
「へえ」
「その母親と申すは……」
「知りませぬわい。金兵衛だとて何も申しませぬよ」
本物の盗賊であればあるほど、仲間同士でも身の上にはふれない。
彼等は、現在の彼等同士が互いに手をむすび信頼をかけ合うことによって成りたつのであった。白輪の伝右衛門を下げたあとも、五兵衛は黙念としてその場をうごかなかった。以来、徳山五兵衛は人が変ったようになった。
「われらの役目は、無宿無頼の徒を捕えるがため、むずかしい規則も手つづきもいらず刑事にはたらく、いわば軍政の名ごりをとどめる荒々しき役目である。このことを忘れるな。町奉行所なぞを相手にせず、懸命にはたらけい!!」
こう言って、みずから部下を鍛え、捕物となれば、いつも出役した。
小田原の尾張九右衛門、奥州・川俣の〔今日本左衛門〕と自称していた只吉という

残酷無類の大泥棒なぞ、いずれも五兵衛の指揮によって捕えられた。

そのほか、六年の間に、八十余人の盗賊を召捕っている。年毎に、五兵衛は厳格謹直な老武士となっていった。本所の徳山ときいただけで悪漢どもはふるえあがったという。

そのころに、五兵衛は屋敷の裏庭に、稲荷の祠をこしらえた。

息子の治郎右衛門が、

「御奇特なことで……」と言うと、五兵衛は、ほろ苦く笑い、

「あの稲荷には、日本左衛門の手下で、天竜の金兵衛というものを、まつったのじゃ」

「それは、また……？」

「別にどうということでもないわえ」

と、五兵衛は、もう相手にならなかった。

徳山五兵衛は峻烈をきわめた活躍をつづけ、二度も〔火付盗賊改方〕に就任をしている。

五兵衛が解任されると、そのとたんに悪漢どもがはびこり出すからであった。

治郎右衛門は、まだ家督前の寛延元年、三十六歳のときに新御番入りを命ぜられた

ほどで、よく出来た一人息子であった。

（なれど、もしもということがある）

五兵衛は、ひそかに思い、従弟・徳山重一（しげかず）の三男・重之（しげゆき）を養子にし、監物（けんもつ）と名のらせた。

「あやつも三男坊では肩身がせまかろう。どうじゃ治郎右衛門、弟にしてやれ。年を老（と）ってからの相談相手にもなろう」

治郎右衛門もよろこんで承知をしたが、

「父上は、もしも、わしが病死でもしたらと思うておられるのじゃ」

苦笑して妻女に語った。二人の間には三人の子が生れていたが、いずれも女であった。

しかし、監物が養子に来てから、妻女が男子を生んだ。六年ぶりの子である。

「監物には、今のうちに、禄（ろく）をわけておいてやりたいと存じまする」

五兵衛が隠居をして、家をゆずったとき、治郎右衛門が言った。

五兵衛は、つくづくと息子の顔を見て、

「おぬしは、わしの子とは思えぬ」

と、つぶやいた。

「は……？」

「いや、わしの子にしては出来すぎじゃ。こりゃ何だの、女房どのの血をうけたのであろ」

五兵衛は、そばにいた老妻の勢以をかえりみて言った。

宝暦七年、七月十八日の夕暮れに、徳山五兵衛は、六十八歳の生涯を終えた。

死にのぞみ、五兵衛は、治郎右衛門のみをそばに呼びよせ、

「おぬし、隠し女はないのか」

「いえ、そのような――」

「隠し子は？」

「とんでもございませぬ」

「あるなら、今のうちに言うておけ。わしが死ぬ前に、手だてを考えてつかわす」

「ございませぬ」

「ふむ……おぬしは、まことに、よう出来た男ゆえ、そのようなものは、ないと思うてはいたが、念のため訊いた。悪しゅう思うな」

五兵衛は、しずかに目をとじ、
「世の中はいかに変ろうとも、人は家を守るものじゃ。家を守る人あってこそ世は立ち行く。これを忘るな。わしが、このことに気づいたのは、わずか十年ほど前のことじゃが……」
「は……」
「その手箱の中に、牡丹の図を彫った笄がある。とってくれ」
「は――これで、ござりますか」
五兵衛は、やせおとろえた手にあの笄をうけとり、しばらくながめていたが、
「この笄を、わしと共に埋めよ。他人に気づかれるな。おぬし、一人にて、ひそかに、たのむ」
「心得ました」
「母にも言うなよ」
「はい。したが、この品は……」
「その笄には、わしの……」
と、五兵衛は嬉しげな微笑を見せ、

「世の中の善も悪も知らなんだころの、生気にみちみちておったころの、わしの思いがこめられておるのじゃ。わしの一生は、あのころをもって、すでに終っていたのやも知れぬなあ……」

「と、申されますと……？」

「訊くな。言わぬ」

降るような茅蜩の声の中に、やがて、五兵衛の呼吸がとまった。

江戸中期の画家・池大雅の名声と名作を知らぬものはあるまい。

雄渾無比の名作をいくつも残した、この超俗の画家の妻で、これも女流画家として著名な玉瀾女史は、徳山五兵衛と、祇園社茶店の女主人・お梶との間に生れた町女そのひとである。

五兵衛三十五歳の折りの有馬での湯治は、おそらく、この事実の裏づけとなるのではあるまいか。もしそうなら、お梶は三十七歳にしてお町を生んだことになる。お梶は、子を生んだことを五兵衛に知らせたのであろうか。おそらく知らせなかったと思われる。

無惨やな　猿子橋母子の仇討ち

一

「これは不思議だ!!」

麻布兵衛町に宏大な屋敷をかまえている神保左京の病気が、一日で快癒してしまったのである。

医薬にではない。八丁堀に住む陰陽師の蒲生佐部というものが〔病気快癒〕の祈禱をしたら、たちまちに、左京の苦痛が消え、日に日に快復に向ったのだ。

それは寛政二年の春だというから、今より百六十年ほど前のことになる。

神保左京は幕府・旗本といっても禄高は六千石という大身で、下手な大名よりも立派な暮しをしている。

その年の正月すぎから、左京は激しい下痢に悩まされ、体は糸のようにやせ細ってしまい、主治医も「これは……」と首をかしげていたのである。

ところが、八丁堀に住む陰陽師が重病の者を何人も祈禱によって癒したという評判を家来が聞いてきたので、

「こうなっては、どのようなことでもためして見るにしくはない」

神保家の家老・崎山平内が、こう言い出し、陰陽師の蒲生佐部を屋敷へ招いたというわけであった。

佐部は、もと土御門家の門弟で、陰陽師の組頭をつとめていたそうである。

陰陽師とは、卜占・祓・身固めなどを行ない天文や暦にも通じ、吉や凶を判断して災厄を避けるための祈禱をしたりする。いわば、今でいう易者と祈禱師を兼ねたもので、いずれも土御門家に属し、運上を納めて鑑札をもらっているのだ。

「何なりと望みのものを取らす。申せ」

神保左京は大よろこびで、蒲生佐部に言ったが、佐部は礼金千匹のうち三百匹を受け取っただけで、

「過分の恵みをうければ、それがしが反って禍いをうけ申す」と言って、欲張ろうとはしない。

「あの陰陽師は廉潔の者じゃ。出入りをさせい」

神保左京は、それからも何かと蒲生の人柄をほめ、出入りをゆるし、いろいろと面倒を見てやったし、神保家の家来たちの間でも、如才のない蒲生佐部の、にこやかな性質が好まれた。

佐部は足しげく神保家へ出入りするうち、その経理事務の才能をみとめられ、家老の崎山平内の推薦によって、ついに神保家の用人として抱えられることになった。

佐部は名を〔彦作〕とあらため、大いに神保家のために働いた。

大身の旗本といっても、それだけに出費が多くて内情は楽でない。その上、主人の左京が派手好きで、遊蕩のほうも人並以上なものだから、四十人余の家来、使用人を抱える神保家も財政行きづまりの状態であった。

ところが……佐部あらため蒲生彦作が用人となってから、彼の手腕により、二年足らずのうちに財政危機を切りぬけたので、

「わしの見込んだだけのことはある。あっぱれな奴じゃ」

主人の神保は、いよいよ、蒲生用人を愛寵するようになった。

家来たちの人気も、蒲生彦作に集まり、何事にも「蒲生殿」でなくては夜も明けぬというありさまになってきた。

こうなると、面白くないのは家老の崎山平内である。

もともと自分が推薦した男なのだが、その男に主人や家来一同の人気が集中されることになると、家老としての面目が失われたような気にもなったし、嫉妬もわき上っ

てくる。

（蒲生が居ては、おれの位置が危くなるやも知れぬ）

こう考えて、ついには蒲生用人を何とかして追い払ってしまいたいという気持になってきた。

そして、先ず崎山家老は、屋敷へ出入りする目明しにたのみ、彦作の過去を洗いはじめたのである。

陰陽師だったというのは、わかっていることだが、その前身にどんなことがあったのかを洗い出し、もしも蒲生に落度でもあったら、これをタネにして彼を屋敷から追い出そうとしたものか……。

そして、崎山平内はついに蒲生彦作の過去をつかんだ。

蒲生彦作は、前に身持ちがよくなくて、陰陽師の組頭もやめさせられ、土御門家からも追放され、江戸へ流れて来てからも五度ほど名を変えていることがわかった。

酒色におぼれて、始末の悪い男であったらしい。

そうかと言って、神保家の用人となってからの蒲生彦作は別に悪いことをするでもなく妻のみさと娘のはると共に神保屋敷内の長屋に住み、しごく真面目に暮していた

のだ。

つまり、蒲生彦作は、この屋敷へ来る少し前から心を入れ替え、ちゃんとした人間になろうと努力しつつあったというわけなのである。

しかし……。

「あのような男を屋敷においては、行末とんでもないことになる」

もともと憎み出している相手の過去が悪いものだとわかったので、崎山家老は、もう辛抱が出来なかった。

「殿。実は、あの蒲生彦作なるものは……」

ただちに、主人の左京へ、このことを告げたのである。

むろん、蒲生用人も呼びつけられて、左京の訊問をうけたが、その結果は、

「前非を悔いているものを今更どうすることもあるまい」

崎山家老の進言は、すぐさましりぞけられた。

そして左京の蒲生用人へかける信頼は、いよいよ厚くなるばかりだったのである。

二

蒲生彦作が暗殺されたのは、寛政五年十月二十三日の夜である。
殺したのは、むろん崎山平内だ。
いや、平内と心を合せる川口嘉作、岸口主水、鹿島菅兵衛など七人が、崎山に加勢をした。
彦作は、
「殿の急ぎの御用あるによって、すぐさまおいで願いたい」
という崎山一派の呼び出しにまんまとかかり、神保邸内裏庭で斬り殺された。
人気のある蒲生彦作だけに、これをねたむ反対派もいたらしい。
ことに、神保家の親戚に当る旗本の伊沢内記は崎山家老がひいきであったから、
「このようなことを公(おおや)けにいたしては神保の家名にかかわろう」
こう言って神保左京を説き伏せ、事件は内済となってしまい、崎山家老は再び屋敷内での威勢を取戻したという。
こうのべてくると、いかに、神保左京という六千石の殿様がバカであったかがよくわかると思う。
何事にも自分の意志というものを通せぬ気の小さな殿さまであったのだろう。

さて――殺された蒲生彦作の遺族は、妻みき（三十六歳）と娘はる（十三歳）であった。

「その方たちには、やがて扶持をあたえようから安心しておれ」

と言いわたしておきながら、翌年の二月になると、

「永の暇をたまわる」

というので、母娘は神保屋敷を追い出されてしまった。

これは、かねてから新参者の蒲生用人をこころよからず思っていた神保家の親籍の伊沢内記が指図したものであろう。

思うに、神保左京は、この伊沢内記という親類に頭が上らなかったものらしい。

とにかく、屋敷を追い出された蒲生母娘は途方にくれた。

「よろしい。私のところへおいでなさい」

こう言ってくれたのは、蒲生彦作が八丁堀にいたころ、一時厄介になっていて陰陽師の手伝いをしていた鹿島相模という男だ。この男も陰陽師である。

蒲生が神保家へ仕えるようになってから鹿島はその後をつぎ、八丁堀で陰陽師をしていたが、間もなく深川森下町に移り住んでいたのだ。

「む、無念です。何の悪事もせぬ夫を、よってたかってなぶり殺しにいたしたのです」

おみきは、鹿島相模に訴えた。

「まことに怪しからぬ。じゃが、こうなっては、もうあきらめるより仕方はござるまい」

「いえ。あきらめようとて、あきらめられるものではござりませぬ。夫は心を入れ替え、何事も神保御家のためと働いておりましたものを……」

みきは、どうしてもあきらめ切れぬらしい。

「こうなれば、どうあっても、崎山平内を殺して、夫の仇を討たねばなりませぬ」とまで言い出した。

「それア、いかん。ま、がまんをしなさい。とてもとても、女の腕で討てるものではない」

鹿島相模も、おどろいた。武士の妻というわけでもない、陰陽師の妻が夫の仇を討とうとまで思いつめているのは、

（よほど、蒲生殿夫婦は仲がよかったに違いない）と、鹿島も思わずにはいられなか

った。

おみきばかりではない。

娘のおはるも、

「父さまが家老の崎山平内に殺された恨みをはらしたい」

と、十四歳の娘が眼の色を変えて言いつのるのである。

母娘ふたりがそこまで決心するというのは、よほどのことでなければならない。

（蒲生殿は、まさに無実の罪を着せられたのに違いない）と、鹿島陰陽師も思わざるを得なかった。

結局は——蒲生用人は会計をごまかして汚職をしていたので斬り殺し、天誅を加えた——ということになっているらしい。

（可哀想に……）と思ったが、鹿島相模としては手も足も出ない。武士でもないし、仇討をさせてやるには背景もなく力もない。

そのうちに……ふと風邪をこじらせたのが元で、鹿島相模は、あっ気なく急逝してしまったのである。

この間に、約一年たっていた。

三

寛政八年正月七日――。

亡き蒲生彦作の娘・おはるは、平井仙竜という陰陽師と結婚をした。

平井は、蒲生とも鹿島とも、よく知っている若い陰陽師で、そのとき二十四歳であったという。

若いに似ず易もうまく、祈禱もたくみなので、繁昌をしていたが、鹿島の家へ遊びに来るたびに、おはると親しくなり、鹿島の没後、おはるを妻にもらいうけたいと、おみきに申し込んだのである。

「お志はありがたいが……なれど、私たち母娘は、仇討つ身でございます」

おみきは、ここにはっきりと、崎山家老を討ち亡夫の恨みをはらしたいという決意を平井仙竜にもらしたのである。

「そうでしたか――」

平井も一時はおどろいたが、若くもあるし、熱烈におはるに愛を感じていたためか、

「よろしい。私も力をお借し申しましょう」

男らしく胸を叩いた。

女への愛情のためとはいえ、男一匹、なかなか、こうは頼母しいことを言えないものだ。

事実、平井仙竜は、その決意をした上で、おはるを妻に迎えたのである。

平井は、深川佐賀町の家を引払い、おみき母娘が住んでいた故鹿島相模の家へ移ってきた。

ここでも、平井の占い(うらな)と祈禱は人気をよび、繁昌をつづけたらしい。

ところで……。

崎山家老のほうは、すっかり、この蒲生彦作の遺族のことを忘れてしまっていた。

いや崎山平内ばかりではなく、神保左京も、神保屋敷のものも、すっかり忘れ切ってしまっていたのだ。

平井仙竜とおはるが夫婦になってから、二年たった。

寛政十一年十一月十二日の朝のことであった。

その日の朝の四つ刻ごろというから、午前十時頃である。

母のおみきと娘のおはるが、深川元町の通りを歩いていると、何の用事か知らぬが、崎山平内が向うを歩いて行くのを見かけた。
「あれは、崎山じゃ。おはる、早く……」
おみきが言うと、おはるは蒼白となって駈け出し、自宅に戻ると、夫の仙竜に、これを告げた。
仙竜は、すぐに脇差をつかみ、
「よし!!」
と叫んで、おはるの手をとり表へ駈け出した。
おはるもおみきも、いつも短刀を隠し持っている。
すぐに、夫婦は、六間堀に沿う道を崎山平内の後からつけて行くおみきの姿を見出した。
「お母さま」
「おふくろさま」
夫婦が駈けつけると、おみきは、引きつりあがった眼を白く光らせ、
「今日こそ、夫の仇を討たいではおかぬ」

と力のこもった声で二人に囁いた。

崎山平内は、ゆっくりと歩を運びつつ、六間堀にかかる猿子橋にかかった。

風が強い。

曇り日で、太陽は雲の層におおわれていて、あたりは夕暮れのように暗かった。

人影もない。

どこかの堀川から、のんびりと船頭が歌う船唄がきこえている。

その船唄が、初冬の風のつよい曇り日の中で何か異様な感じで、崎山をぬらう三人の胸に迫った。

崎山平内は、後でしらべたところによると、深川に囲っていた妾の家へ泊った。その帰りであったともいう。

崎山が猿子橋をわたり、河岸通りを中ノ橋へかかったときである。

「えい!!」

後ろからつけて来た平井仙竜が脇差をふるって斬りつけてきた。

「何をする!!」

叫んだが、陰陽師にはめずらしいほど正確な斬り込みで、平山の一刀は、崎山平内

の肩先を斬っていた。
「おのれ――」
崎山平内も抜刀した。ときに三十一歳とも三十三歳ともいわれている。
そこへ、おみきとおはるの母娘が駈けて来て、
「夫の恨み……」
「父の仇……」
夢中になって短刀を突き込んでくる。
「何をする!!　こら!!」
崎山は必死になって刀をふりまわしたが、この時代の武士は、よほどのものでないと武道のほうの心得は、あまりないと言ってよい。
親代々、神保家の家老をつとめていた崎山平内は、あまり剣のほうは得意でなかったとみえる。
と言っても、討つほうも武士ではない。
互いに呼吸をはずませつつ、四人が入り乱れて刀をふるい合った。
平井仙竜も崎山の一刀をうけて血みどろになりつつも、

「おのれおのれ!!」
もう無茶苦茶に斬ってかかる。
「う、うわ、わわ……」
ついに、崎山平内は三人の刃をうけて倒れた。
ここへ役人が数名、駈けつけて来た。
「引け、引けい」
双方を分けたが、まだ崎山平内は死んでいなかった。
崎山の疵は八カ所、おみき、おはる、平井仙竜もそれぞれ四、五カ所の疵をうけていたという。
役人が来たために、この場所で仇を討ち果たすことは出来なかったが、数日して、疵がもとになり崎山平内は神保屋敷内の自宅で死んだ。
平井仙竜も、これを追うようにして死んだ。これも斬り合いの疵がもとになったのである。
この事件は、当然に奉行所の調べをうけることになり、三カ月余も調べがつづけられたが、ついに、おみきとおはるは、

「お構いなし」ということになった。

神保左京という旗本が六千石の大身である上に、仇討の事情が事情だし、調べを深めれば深めるほど、神保左京という殿様の人格が表向きになることだし、神保の親類たちも、例の伊沢内記をはじめとして、

「もみ消してしまわねばならぬ」というので、大分に運動をしたらしい。

それに何よりも、やはり蒲生彦作が神保家において、汚職のようなまねをしていなかったのが奉行所にもわかったのであろう。

これで——一番損をしたのは、蒲生彦作であり、彦作を殺した家老の崎山平内である。

前者のうらみも、後者のうらみも、共にもみ消されてしまったのだ。

崎山平内も別に悪いことをしたとは思っていなかったろう。

おみきは仇討ちのとき四十一歳、はるは十七歳であったという。

真田信之の妻——小松

晩秋の伊那谷を越えて……

戦国から封建の世にわたって、日本の女性は、すべて男たちの野望と権勢と暴力の前に犠牲を強いられ、悲歎の一生を送らざるを得なかった……というのが、現在では通説となっている。

むろん、そうした例もある。

だが、そうでない場合も多い。

いつの時代においても、男女両性にあたえられた特種な機能は、それぞれに見事な開花をしめしているのであって、ことに、戦国の時代には女性が男性におとらぬはたらきぶりを見せたのである。

ひとくちに政略結婚という。

武将や大名たちが、互いの利害関係によって、その娘や妻までも相手方の男と縁組をさせ、互いの勢力の温存をはかるということは常識であった。庶民のそれは別のことだ。

武士の家にあっての常識なのだから、これを「不幸」と見ることもなく「悲しいあ

きらめ」と思うことも、そのころの女たちにはなかったといってよい。

領国と一族と家来とを抱え、命をかけて、すさまじい弱肉強食の世界へおどり出て行き、何としても生きぬこうと、闘う男たちに負けてなろうか、というほどの意気ごみすらもっていた女たちが、かなりあったのである。

本多平八郎忠勝の娘、小松も、そのひとりであった。

小松が、信州の武将真田信之に嫁ぐことにきめられ、父の平八郎忠勝が、

「こたびの縁組については、そなたも、よくよくの存じよりがあろうな」

と、念をおした。

「はい」

小松がうなずき、答えようとすると、

「よし。きかいでもよい。そなたなら、きっとやってのけてくれよう」

父親は、にこりとして、これを押しとどめた。

本多平八郎忠勝は、

「家康にすぎたるものが二つあり。唐の頭に本多平八」

とまで世にうたわれた、徳川家康麾下の猛将であった。

本多家は、藤原兼道の流れで、はじめは豊後国・本多庄に住し、それから本多姓を名乗ったという。

この本多氏が三河の土豪であった松平氏の家来となったのは、平八郎忠勝から四代前の助時のころからしい。

忠勝は、永禄三年に亡父の後をつぎ、徳川家康に召出され、挙母の城攻めに初陣をした。ときに、十三歳だったという。

以来、六十三歳をもって没するまで、従軍五十余度におよび、討ちとった敵の首級は数知れず、いく度も勝利にかかわる武勲をあらわしたが、疵一つ負うことがなかった。

唐の頭——つまり唐牛の毛をつけた兜をかぶり黒の鎧をつけ、蜻蛉切とよばれる一丈五尺の長槍をふるって闘う本多忠勝の勇名は主人・家康が着々と地盤をかため、ついに天下の権を指呼の間にのぞむところまで行きつくのと歩調を合せ〔徳川の名臣〕の一人として自他共にゆるす武将となった。

忠勝は、妻於金との間に一男二女をもうけた。

長女が、小松であって、彼女は天正元年の春にうまれた。

この年の四月十二日に、武田信玄が死んでいる。前年秋大軍をひきい甲府を発して上洛の途につき、徳川・織田の連合軍を破って一挙に京都に入り、天下をつかもうとした信玄は、十二月二十二日に、三方ケ原において徳川軍を破った。

決定的な打撃をうけ、家康が単騎、浜松城へ逃げ帰ったのは有名な話だが、それだけに信玄の死は、徳川家康を蘇生の思いにさせたことだろう。

これから十年目に、信玄の子・勝頼が織田徳川にほろぼされ、その年には、すでに天下人とよんでもおかしくない織田信長が本能寺の変によって急死をした。

これから、天下は豊臣秀吉のものとなって行くわけだが、同時に関東における徳川家康の経営も、すばらしい勢いをもってふくらんで行くのである。それは後年、家康が天下人となった土台ともなるもので、このころから家康は、いずれは天下をつかもうという決意をかためたらしい。

小松が、真田信之の妻となったのは、天正十四年とも十八年ともいわれている。前後の事情を考えてみると、どうも小田原戦争（秀吉の北条攻め）があった十八年の秋であったと思われる。

小松の母の於金は、阿知和右衛門の女ということになっているが、一説には、家康

の長男・信康の女だともいわれ、そうなると、平八郎忠勝は家康の孫聟ということになるし、小松は家康の曾孫というわけだ。

そこのところは、はっきりしないが、一応『寛政重修諸家譜』によって阿知和右衛門の女が小松の母、ということにしておきたい。その方が、家康と忠勝の間にも無理のない見方が出来るようだ。

ともかく、徳川家康は、小松を自分の養女ということにして、信州の武将・真田昌幸の長男・信之と結婚させたのである。

もちろん、これは政略結婚である。

新郎新婦は、婚礼の当日まで一度も互いに顔を見たこともない。

十八歳の小松は、駿府（静岡）城下から、はるばると晩秋の伊那谷を旅して、信州・上田に居城をかまえる真田家へ嫁いで行った。

明日よりは敵

真田家は、もと武田信玄麾下にあったもので、武田滅亡後は、豊臣秀吉の知遇を得ていた。

「秀吉公のためならば命も惜しいと思わぬが家康になぞ頭は下げぬ」

真田昌幸は信州の地にあって、何かというと徳川にタテをつく。家康のいうことなぞに耳をかそうともしなかった。

ついに家康もたまりかね、上田城を攻撃したのが天正十三年八月であった。このとき、徳川軍一万余の軍を迎え撃った真田勢は、わずかに二千。それでいて、さんざんに徳川軍はやっつけられてしまった。

これで真田の武勇が世にとどろき、いささか家康も面目をつぶしたものである。

「まあまあ、仲よくせい」

仲に入ったのが秀吉である。昌幸は、先に次男幸村の妻に、大谷刑部の女(むすめ)をむかえている。これも秀吉の口ききによるものだが、今度も秀吉のはからいで、家康の養女を長男・信之の妻に、ということになり、

「家康のところからなぞ、嫁はもらわぬ」

しきりに反対をしたが、

「真田の家が、天下をとれるわけではなし、こたびのことは、秀吉公、家康公、双方にむすびついていささかもおかしゅうはない縁組でござるゆえ、私は承知いたしたい

と存じます」

と、反って信之が父をいさめた。

「ふん。お前は、武田家をほろぼした徳川の女を女房にしたいのか」

「はい」

「けしからぬ」

怒ったが、とにかく秀吉が間に入っているので、昌幸もついに承知をした。

新郎は二十五歳。新婦十八歳の結婚であったが、

「嫁のつらを見とうもない」

上田城内にあっても、昌幸は、めったに小松と顔を合せることがなかったという。

「どうも虫が好かん、家康という狸めは――」

というのが昌幸の口ぐせで、よほど家康がきらいだったものらしい。

小松の結婚が、どういう性質をもっていたか、これでわかろう。

わが父・本多忠勝がつかえる徳川家康という〔主家〕と、信州一帯に勇名を馳せている〔真田家〕との融和に、彼女は大きな役割を果たすことになったのだ。

政略結婚でむすばれても、嫁に行ってしまえば後は夫にかしずくだけ、という女も

あるわけだが、小松の場合は、ちがっていた。

嫁ぐについて、父の忠勝が、

「存じよりもあろうな」

というのは、むすめのはたらきに期待をかけていたからである。

「はい」

と答えたのは、十八歳の小松に、それだけの決意があったからである。

政略結婚とはいえ、真田信之と小松の場合は、非常にうまくいった。

信之も端正な風貌、冷静沈着な人柄だし、小松も、いまにのこる肖像からおしはかって見ても、かなり美しい女であったことがわかる。

本多平八郎忠勝という武人は部隊をひきいて戦場にのぞみ、一分のすきもない駈け引きをしめすと共に、みずからも卓抜した闘いぶりをしめすほどの人物だ。こういう人物を父親にもった小松だけに、むろん、女としての教養、妻としてのつとめに欠けるところはない。

「信之め、女房にうつつをぬかしておる。けしからん、けしからん」

真田昌幸が、くやしがるほど、夫婦仲は日毎に濃密となった。

真田信之が、妻の小松から徳川家康という大名について、徳川家の政治、経済、家臣団の見事なチーム・ワークについて、充分な知識を得たことはいうまでもない。

徳川家というものを夫に理解させるべく、小松は精魂をかたむけたといってよい。

この結果が、あの関ガ原の戦役に実をむすんだのである。

豊臣秀吉は、天下統一をなしとげたが、朝鮮征伐の失敗と共に健康にわかにおとろえ、慶長三年八月に病没をした。

秀吉亡きのち、勢力は二つに割れた。

その一つが豊臣派の石田三成を主軸とするものであり、もう一つが、徳川家康のそれであった。

両勢力の衝突が関ガ原の役であり、これがいわゆる天下分け目の戦役となったのである。

そして、真田家も、このとき二つに別れたのだ。

そのころ、真田昌幸は次男・幸村と共に上田城にあり、長男・信之は沼田城にいて沼田領をおさめていた。

この年――慶長五年七月に、徳川家康は、会津の上杉景勝が叛旗をひるがえしたの

で、六万に近い大軍を動員し、会津征討の軍旅についた。
このすきに、石田三成は上方に兵をあげたのである。
この大戦争前後の模様を、くわしくのべているひまはない。
真田父子は、いやいやながら家康に従い（といっても先発隊であった）会津へ出陣をしたが、野州・天明（現在の佐野）まで来たところで、石田三成からの密使がもたらした書状をうけとった。
豊臣家のため、秀吉の遺子秀頼をたすけ、家康を討つのだから、ぜひぜひ、こちら方へ加担してもらいたいというものだが、
「けしからん」
昌幸は、これほどの大事を前もって自分へ知らせなかった三成に怒った。
昌幸としては、大きらいな家康のためにはたらく気はないし、大好きだった秀吉の遺子・秀頼のことは絶えず気にかかっている。
豊臣家のために乾坤一擲の戦いを家康にいどむのは、愉快きわまることであった。
「なぜ前もって相談をしてはくれなかったのか」
と、昌幸はすぐに三成へあてて詰責の急使を送った。

この手紙は七日間で、近江の佐和山城にいる三成へとどき（二十七日）これに対し、三成は七月晦日附で、いいわけの手紙を上田の昌幸へ送っている。

「…申しわけのないことだが、つい先ごろまで家康は大坂におり、しかも諸大名の心中もはかりがたいので、事のもれるをおそれ、わざと御相談することを遠慮したのである。申しわけなかったけれども、貴所はかならずや豊臣家のために起ってくれると信じていたればこそ、こうした処置をとったのであるから、どうか、おゆるしをいただきたい」

およそ、こうした内容のものであった。

だから、昌幸は、三成へ詰責の手紙を出すのと同時に、家康にもことわらず、ひそかに陣をはらい、上田へ向ったものと思われる。

とにかく、西軍（豊臣派）の旗上げを知るや、昌幸は、

「すぐに、信之をよべ」

と命じた。

信之は、少しはなれた犬伏（いぬぶせ）に陣をしいていたからである。

家康の本陣は、江戸を発したばかり（二十一日）のころであったろう。

昌幸は、このとき五十四歳。信之は三十五歳。幸村は一つ下の三十四歳だ。
「いかがに思うか」
と、先ず昌幸は、長男に三成からの密書を見せて問うた。
すると信之は、うすら笑いをうかべ、黙って首をふって見せる。
「何じゃ、それは……？」
「いけませぬ」
「何じゃと？」
「このたびのことは、石田三成の奸謀でござる」
「何をいうか――」
「亡き太閤殿下のおんため、また秀頼公のおんためとあらば、このような無謀なる旗上げをおこなうべきではございませぬ。このことに組して西軍につくことは危うござる」
「家康を、それほどにおそれるのか、おぬしは――」
「いかにも――」
「何……」

ここで信之は口をきわめて、徳川家康の実力をとき、兵力の如何にかかわらず、三成が勝利をつかむことは出来ないと説いた。

「それがしは、三成殿に何のふくむところはございませぬが、かれは、これほどの合戦を指揮する器ではございません」

そもそも、故秀吉の忠臣とよばれた加藤清正、福島正則など、秀吉子飼いの大名たちと三成との反目の深刻さだけを見ても、これだけの大戦争をする前の準備に遺憾があり、とても不安でついては行けない、と信之はいった。

家康の急速な発展にたまりかねて事を急ぐ三成の挙兵は、

「あまりにも小ざかしく、あまりにもあせりにすぎ、思うてみただけでも苦が笑いがこみあげてくるばかり――」

と、信之はいい放った。

そして、自分は家康の養女を妻にむかえ、恩顧をこうむることもふかい。とても家康に叛くわけには行かないと断言をした。

ここで、真田父子は、敵味方に別れることになる。

この夜の密議について、二説ある。

一は、両者の意見が合わずに別れた。一つは、相談ずくで別れたというのだ。前者は『真田記』、後者は『真武内伝』の説である。『真武内伝』に、昌幸のいわく

「……いま天下の安危決しがたく、汝（信之）は内府（家康）に属し、左衛門佐（幸村）は大谷刑部少輔が聟たれば、われと同じく秀頼に属し、運を両端に計り、家廟を保たん」

つまり、どちらが勝っても負けても、真田一族の存続をはかるべきだというわけで、父子共謀し東西に分属したというものである。

事実、後年になって、

「真田父子ならばやりかねまい」

ということになったことはたしかだが、どうも信じかねる。

これは、むしろ、信之自身の胸中にひめられたものであったといってよかろう。

真田家は、主筋にあたる武田家滅亡後に、尚も、織田や徳川に刃向う気勢をしめしたほどで、本来ならば今まで通りに、上田の本領を我物にしていられるわけのものではなかった。

それを秀吉の好意によって家の安泰を保証された上に、家康との間もうまく行くよ

うになったのであって、

「太閤殿下御懇意は忘るべからず」

昌幸の決意はかたい。

ついに、真田信之は父と弟に別れ、

「明日よりは敵。もはやこれまでござる」

犬伏へ帰陣した。

「こうなれば、ぐずぐずしてはおられぬ。陣ぶれいたせ」

疾風のように兵をまとめ、昌幸父子は天明を出発したが、

「どうせ帰り途じゃ。沼田へ寄って孫の顔を見て行きたい」

と、昌幸がいう。

沼田城に留守をしている小松は大きらいだが、信之と小松の間に生れた信吉（六歳）と信政（五歳）は目に入れても痛くはない。

「こたびの戦さには、わしも立派に討死するつもりゆえ……」

二人の孫に別れをつげたいというのだ。

信之は、うかつに犬伏をうごくわけに行かない。すでに江戸を発した家康の指示を

仰いでからうごかぬと、どのような目で見られるか知れたものではない。
父と弟は、勝手に軍列を離脱し、さっさと上田へ帰ってしまったのである。

さすがは本多のむすめよ

上州、沼田の城に留守をしていた小松は、夫・信之からの急使をうけるや、
「門をとじよ」
城門のすべてをとざし、留守居の士卒百三十余名に武装をさせ、みずからも侍女たちと共に具足をつけ、長刀をつかんで起った。
ここへ、上田へ帰る昌幸と幸村の部隊千四百がやって来た。
「上田の大殿が御到着でござる。御開門ねがいたし」
大手の城門前で、家来たちがいくら叫んでも、小松は門をひらかない。
「よし。わしがかけ合う。小松に出よといえ」
仕方なく、昌幸が城門前へ出て来ると、小松が長刀をかいこみ、石垣の上の櫓へあらわれた。
「嫁女。しばらく休ませてくれぬか」

「昨夜、信之より使者がまいっておりまする」
「ふむ。そなたとも孫たちとも敵味方になったと申すのか」
「はい」
「ま、よいではないか。孫の顔だけ見たら、すぐに帰る。一寸、見せてくれい」
「なりませぬ」
「何じゃと――」
「かようになりましたからには父上とても城内へお迎えするわけにはまいりませぬ。おひきとりねがいまする」
　このとき、下ぶくれのした可愛らしげな小松の顔が、見るもすさまじい緊張に引きしまり、
「お帰り下され」
　つけこむ隙もない。
　今までは、おだやかで微笑を絶やさず、あまりよい舅（しゅうと）ではなかった昌幸へも、しとやかにつかえてくれていた小松を見ていただけに、さすがの昌幸も、しどろもどろになり、

「会わせぬと申すなら覚悟があるが、よいか」
と、威しにかかった。
「会わせぬとは申しませぬ」
「何——」
「かようになされませい」
つまり、全軍武装を解けば、父上だけを城内に迎えてもよいというのだ。
「なるほど……」昌幸は、にやりとして、
「わし一人を城内に入れて、どうする」
小松がいうには、父上を孫にお会わせするかわり、人質になってもらう。それでいけなければ、お帰り下さい——とのことで、
「無礼な——」幸村の方が怒り出して、
「かないませぬ、父上。沼田を焼きはらってしまいましょう」といい出した。
「ふふん……」昌幸は鼻で笑い、
「そうするのはわけのないことじゃが……そうなると、嫁も孫も城を枕に討死ということになろう」

「気おくれなさいましたか」
「気おくれではない。嫁はいいが、孫を死なせるわけには行かぬ」
「何、まさか、あのような子供を……」
「あの小松の眼を見よ。いざとなったらおのれの喉をつくばかりか、我子二人の首をはねようという面がまえじゃ」
数倍の軍勢に包囲されつつも、城内の士卒はいささかも動ずることなく、小松のためならば地獄までも供をするといった気魄にみちみちている。陣所にしていた正覚寺へ、昌幸は仕方なく戻って来た。
「左衛門佐、おどろいたな」
「はあ……」
「さすが、本多平八郎のむすめじゃ。信之も大変な女を嫁にもらって、仕合せなやつじゃ」
「いかにも――」
「いまはじめて、わしは、嫁を見直したわえ」
孫に会えぬさびしさよりも、小松のすぐれた素質を見出したことに、昌幸は感動し

たようである。夜道をかけて上田へ向う道々にも、
「さすがは本多のむすめじゃ」
何度も、くり返した。

厳粛な尊敬の念

関ガ原の合戦は、徳川方東軍の勝利となった。
真田昌幸と幸村の父子は、上田城に拠って関ガ原へ向う徳川秀忠の軍を苦しめ、これを釘づけにしてしまった。このため、秀忠は関ガ原への参加が、ついに間に合わず、父の家康から大目玉をくらったものである。
昌幸と幸村は、当然、斬首になるべきところを、信之が必死の嘆願をしたので、命だけはゆるし、昌幸父子を紀州・九度山へ配流することになり、ここに上田城は徳川の手に接収されてしまった。
徳川家康は、真田信之に対し、非常な信頼を寄せていたようである。
ということは——、
信之の注意ぶかい行動と、あくまでも家康へつくそうとした忠誠とが、絶えず、小

松からの報告によって家康の耳に入っていたからでもある。こうのべてくると、小松は信之の妻でありながら、徳川から派遣されて監察の役目をもおびていたように見えるが、小松にしてみれば、いうまでもなく夫のため、夫の家のためにしたことである。

昌幸と幸村の助命にしても、これは小松から家康への嘆願が、かなり大きく物をいったと見てよい。

慶長十五年十月十八日――小松の実父・本多平八郎忠勝が、桑名の居城において病没した。ときに六十三歳である。

これから五年後の元和元年五月――あの大坂夏の陣があって、ここに、豊臣の残存勢力は一掃され、天下は名実ともに徳川のものとなった。

大坂の戦いに、真田幸村が九度山を脱し、豊臣方の軍師として大いに家康をなやませたのは有名な話だが、このとき信之は、家康の密命によって、何とか弟の幸村を味方に引き入れようとした。

夏の陣の前に冬の陣があり、その間の休戦期に、信之は京都で幸村と密会している。

このとき、信之は五十歳。幸村は四十九歳で、老父・昌幸は慶長十六年に、六十五歳をもって九度山の配所に死んでいる。

兄弟は、関ガ原以来、十五年ぶりの対面であった。しかし、幸村はあくまでも大坂城へこもって戦う決意なので、信之も仕方なく、

「せめて、おぬしの子の大助だけは、こちらへよこしておけい」

すすめたが、幸村は、これも辞退し、夏の陣では幸村も大助も見事な戦死をとげた。

この信之と幸村の密会の手引きをした女性が、小野お通という女性であった。

お通は、宮中にもつかえ金子二百両、百人扶持をたまわったこともあり、諸礼式に通暁しているところから、後には秀吉にもつかえ秀吉没後は家康の扶持をうけているという才色兼備の女である。このお通に、何と信之が恋をしてしまったのである。

大坂戦役がすみ、家康は特別のはからいをもって、それまでは徳川家が管理していた上田の城を、信之に返してくれた。

「沼田は、信吉にあずけよう。たのむ」

と、信之は小松を沼田城へ残し、みずからは上田へもどり、城下町の建設に、領地

の治政に力をつくした。

真田の領地は、上田が六万石。沼田が三万石ということだが、小松は、まだ若い長男の信吉をたすけ、沼田領の治政に心をくばった。

こうして、上田の信之と京都にいる小野お通との間に、何度も書簡や贈物が交された。

信之も、恋人のいる京都へ飛んで行きたいのは山々だが、うかつにはうごけない。大名の旅なぞというものは、いちいち将軍のゆるしを得なくてはならぬし、それでなくとも、父と弟を敵にまわして来た信之の進退には、いちいちうるさい評判が立つ。

大御所の家康が理解してくれているからよいようなものの、現将軍・秀忠は、真田一族に——いや、信之にも好感をもってはいないのである。

信之にしてみれば、切ない恋だったといえよう。

妻の小松へ対する愛情は、もはや互いに厳粛な尊敬の念に変っていた。

それだけに、三十をこえてはいても豊満でなまなましい女の魅力をたたえたお通に、信之は心ひかれたものであろうか——。

徳川家康は、大坂戦の翌年に病没した。

こうなると、徳川幕府の真田家に対する見方が、がらりときびしくなった。何といっても将軍秀忠の真田ぎらいは人も知るところで、

「これからは風あたりがつよくなりましょうな」

久しぶりで上田へやって来た小松が信之にいうと、

「むずかしくなろう」

信之も妻には隠さず、沈痛に、

「もはや、戦火は絶えた。どこまでも耐え忍ばねばならぬ」と、いった。

小松は賢こいだけに、信之とお通との恋情を嗅ぎつけたようである。沼田から上田へ、小松はひんぱんに往復しはじめた。

元和五年六月——。

豊臣家譜代の重臣でありながら、関ガ原のときも大坂戦のときも徳川方に従った福島正則が、領国の広島を追われ、信州の高野へ蟄居させられてしまった。

幕府の統治は峻烈をきわめ、諸大名の謀叛をおそれ、複雑な諸制度を次々に発し、改易（領主の入替々）や取つぶしを容赦なく行い少しは残っていた諸大名の出城をも

徹底的に取りこわしてしまった。

信之が、上田城の修築を願い出たときも、ピシリとはねつけてきたものだ。

信之は、首をすくめて苦笑をした。

福島正則も城の修築を幕府の反対を押しきってやってのけたのが原因で、取りつぶしにあったのである。

幕府の制度や法令が大名たちを圧倒し、縛りつけた。小松は、福島正則について、

「福島様が、あの大坂御陣の折、思いきって豊臣方へ御加勢なさいましたら、どうなっていたでございましょう」

と、信之にいった。

「どういうことじゃに」

「こうなりましたからには……あのとき、亡き大御所様の御手をふりはらってまでも、大坂の城へ駈けつければよかったと、福島様は悔んでおられるやも知れませぬな」

「血の気の多い御仁ゆえ、あるいはな」

夫妻は、顔を見合い、にこりと笑い合った。

二人とも、これからはどこまでも耐え忍び、真田の家を守りぬこうと誓い合ったの

である。

元和六年正月——。

風邪をこじらせたのがもとで、小松は沼田城内の館へ引きこもったが、二月十四日に病没した。信之は上田から騎馬で駈けつけて来て、ようやく臨終に間に合った。

「まだ雪もとけぬのに、ありがとうございました」

小松は礼をいい、息をひきとる直前に、

「もう京の女をおよびになってもかまいませぬ」

いたずらっぽく、信之にささやいたという。

小松の没年は、四十八歳であった。

翌々年の元和八年八月——。

真田信之は、幕府の命によって、上田から信州松代へ国替えを命ぜられた。

九万石が十三万石にふえたのだが、実際は左遷だ。松代は実りゆたかな上田領と比ぶべくもない荒地が多く、どう考えても引き合わぬ国替えであった。

「小松も、あのときに亡くなってよかったかも知れぬ」

信之は笑ったが、それでも幕府の命をつつしんでうけ、松代へ入った。

以来、明治維新にいたるまで、真田家は松代の領主として存続をした。

真田信之は九十三歳の高齢をもって、万治元年十月十七日に、松代城外の隠居所に没した。小松のささやきにもかかわらず、信之とお通との恋は、ついに実をむすばなかったようだ。

真説　決戦川中島

海津の城

NHKテレビの上杉謙信の一生を描いた「天と地と」がブームとなり、謙信の居城があった越後・春日山をはじめ、彼の好敵手として欠くべからざる武田信玄も大きくブームの中へ割りこんで来て、信玄の居城があった甲府や、この両雄が残した足跡(そくせき)をたどり、今夏はいっせいに観光客が押しかけたという。

上杉謙信・武田信玄両雄の合戦は、二十余年の長期間――すなわち信玄の死にいたるまでつづけられたわけだが、その戦役の中で、もっとも有名なのが、永禄四年におこなわれた〔川中島〕の決戦であろう。

学者の中には、いま、われわれが知っているような決戦はおこなわれなかった、という人もいる。

だからといって、決定的に否定できる有力な〔史料〕もないのである。

この稿では、あくまでも〔川中島決戦〕がおこなわれたものとして、はなしをすすめて行きたい。

久しぶりで先日、信州・川中島へ出かけて見ると、なるほどおそるべき観光ブーム

になってい、上杉謙信が単身、馬を駈って武田信玄の本陣へ切りこみ、馬上から信玄へ切りつけて傷を負わせたという八幡原の戦跡の草原は、観光客の車が〔すしづめ〕になっている。

ここを〔駐車場〕としてしまったものだから、例の〔一太刀七太刀之跡〕と記した記念の石碑も、他の場所へ移すというさわぎだ。

長野市から犀川と千曲川にはさまれた平野を、南へ約二里ほど行くと松代町へ着く。

真田家十万石の城下町であった松代も、去年までは古いねむりからさめぬような小さな町で、観光客は見むきもしなかったものだ。

この真田家の居城が町の北西の外れにある。いまは本丸の石垣を残すのみだが、この城址こそ、川中島決戦の折の〔海津城〕であって、甲斐の国から信州へ打って出た武田信玄は、ここへ全軍をおさめ、越後から信州へあらわれた上杉謙信との決戦にそなえた。

いま、この城址の石垣にのぼって見ると、西方に、上杉軍が陣をかまえた妻女山が、それこそ手をのばせばとどきそうな近間にのぞまれる。

松代町も、この夏は観光客で混雑をきわめたそうである。

ところで……。

武田信玄が、当時は信濃の国・松井の郷・小淵とよばれていた松代（まつしろ）に〔海津城〕を築いたのは、天文二十一年から二十二年（西暦一五五三）ごろであったろう。

川中島の決戦は、それから九年後におこなわれたわけだ。

この九年の間にも、信玄と謙信は何度も信州で戦闘をまじえている。

そのころになると……。

戦国時代も、ようやく終末期に入って、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信をはじめ、関東の北条氏、東海地方における今川氏、中国地方の毛利氏などの有力な大名に、それぞれ勢力が結集しつつあった。

上杉謙信（当時は長尾景虎）は、関東管領の職にあった上杉憲政（のりまさ）が北条氏康（うじやす）に追われて越後へ逃げて来て、

「どうか、関東平定のために、ちからを貸していただきたい」

と、たよられたので、越後からはるばる関東を制覇すべく乗り出してきた。やがて彼は上杉憲政から関東管領職と上杉の名をゆずられ、長尾景虎から上杉輝虎となり、

号を不識庵謙信と名のることになる。

こうなると……。

上杉謙信はどうしても、領国の越後から信州を通って関東へ出兵しなくてはならない。

ところが、その信州の武将・豪族たちは、甲斐の武田晴信の勢力に対抗できなくなり、武田の傘下へ入るか、または戦って敗れ、越後の上杉をたよるかという様相を呈してきはじめた。

前者の代表が真田氏であるとすれば、後者は村上氏であろう。

武田晴信は、領国・甲斐の国の背後にある信州の国を平定しておき、それから関東へ、東海へ……さらに制圧をすすめて天皇おわす京の都へ入って〔上洛〕ののぞみを果たし、天下をわがものにしようとしている。晴信も上杉謙信同様に法体となり、出家して〔信玄〕と号した。二人ともに、ひたすら戦陣へ没入し、戦乱の世に勝ちぬいて行こうという決意をかためたわけである。

で……。

武田信玄が、信州を平定しかけた、とおもっていたら、上杉謙信が越後から本腰を

入れて信州へあらわれて来た。

信州の武将たちや、関東の管領にたよられ、

「先ず関東を治めねばならぬ」

と決意したからには、どうしても信州をわがものにしなくてはならないのである。

上杉に信州へ出て来られては、武田も安心をして〔上洛〕への道を突き進むことができない。すこしのゆだんがあれば、すぐに背後を上杉軍におびやかされることになる。

そこで武田信玄は、信州の諸方をかためて上杉軍にそなえ、何度も戦闘をくり返した結果、

「このままにては、いつまでも結着がつかない。全力をかたむけて決戦をいどみ、上杉を討ちほろぼしてしまわねばならぬ」

と考えた。松井の郷に〔海津城〕という堅固な城を築いたのも、ここを決戦の基地にするつもりであったからだ、といわれている。

城は、本丸・二の丸・三の丸など、幾重にも堡壁をめぐらして曲輪を分ち、たとえ外郭が攻め落とされても、絶対に内郭は破れぬという、信玄にとっては自慢の堅城で

あったが、皮肉にも、いざ決戦となったとき、この海津城は役に立ててはもらえなかった。

海津城は東南西の三方を山脈にかこまれてい、その西方から北へかけて善光寺平の平原をのぞみ、城は千曲川に沿う岸崖の上に在った。現在の城址からは想像もできぬ地形であったらしく、現・松代町の十分ノ六は城の外郭にふくみこまれていたという。

決戦前夜

ここで、武田・上杉の両軍の大決戦がおこなわれた永禄四年という年をふりかえって見たい。

現在より約四百年も前のことだ。

武田信玄四十一歳。

上杉謙信三十二歳である。

ちなみにいうと、その前年の永禄三年。

織田信長が桶狭間に今川義元を奇襲して意外の大勝利をおさめ、戦国大名の〔新興

勢力」としての第一歩をふみ出している。

だが、織田信長の前途などは、当時まったく未知数のもので、上杉・武田両軍の勢力と戦陣の経験豊富な強兵にくらべたら問題にされていなかったといってよい。

信玄も謙信も、まさかに尾張の小勢力にすぎぬ織田信長が、十年も経ずして天下一の勢力をそなえようとは、おもってもみなかったろう。

永禄四年三月。

上杉謙信は越後から関東へあらわれ、北条氏康を小田原城に包囲した。

関東管領というのは、関東地方を統治する役目で、足利将軍の室町幕府の職名なのだが、かんじんの足利将軍が戦国乱世の渦に巻きこまれて、まったく実力をうしない、幕府の本拠である京都に腰を落ちつけていることすらできぬ状態であった。

天皇と朝廷をまもる将軍がこれなのだから、むろん、朝廷にも戦乱を取りしずめるちからはない。

だから〔関東管領〕などは名のみの役職なのだが、上杉謙信は、この役職に任じた以上は、

「かならず、わが手をもって関東を平定せねばならぬ!!」

決意を固めている。

義理堅くて正義感の強い謙信は、春の雪どけを待って、越後から出兵し、信州・上州から関東に転戦し、また冬の季節を迎えると兵をおさめて越後へ帰って行く。すると、それを待っていたように武田信玄があらわれ、せっかく上杉謙信が確保した諸方の城や砦を侵掠する。

翌年の春になると、また謙信が出て行く……というわけで、上杉謙信にとっても武田信玄の存在は実にうるさく、邪魔なもので、謙信は何度も諸方の神社へ、

「かならず、武田信玄を討ちほろぼす」

との願文をおさめ、闘志を燃やしている。

北条氏の小田原城は、城下町をも城郭内にふくめた堅城で、

「たとえ十年を籠城しても困らない」

と、北条氏が豪語するほどだから、簡単には落ちぬ。しかし、このときの上杉謙信は一挙に北条氏康を討滅してしまうつもりで、怒濤のように関東へ、小田原へなだれこんで来たものだから、北条軍は城を出て迎え撃つ余裕すらなかったといわれている。この前年は謙信、越後・春日山の居城へはもどらず、上州・厩橋（現前橋）の城

で越年していることから見ても、小田原攻めには相当の決意をもってのぞんだらしい。

北条氏康は武田信玄と同盟して、ことごとに謙信をなやませている。

ともかく、小田原が落ちぬので、上杉謙信は鎌倉へもどり、鶴岡八幡宮へ〔管領就任〕の社参をおこなった。

この日。

謙信は、足利将軍からゆるされた網代の輿に乗り、前後左右に重臣をしたがえ、関東八州の諸将にかこまれつつ、八幡宮の神前において〔上杉〕の家督を正式についだわけである。

そして、ひとまず兵をおさめ、またも上州・厩橋の城へもどった。

小田原は落とせなかったけれども、去年からの関東滞陣によって、関東の諸将（関東諸国の二百五十余氏といわれる）も傘下におさめることができたし、謙信にとって、その収獲は大きかったといえよう。

ところが、上杉軍が関東へ主力をかたむけている隙に、武田信玄は信州へ進出をし、諸方の基地を強化すると共に、越後との国境に近い野尻湖の近くにある上杉方の〔割ケ嶽城〕を攻め落としてしまった。

これをきいて上杉謙信も、
（信玄め、いよいよやる気だな）
と、おもったにちがいない。
時期からいっても、このあたりで両軍が雌雄を決するには当然というべきだった。
そこで謙信は、厩橋を発し、春日山の居城へ帰った。
武田信玄との決戦となれば、充分の軍備をととのえておかねばならないからだ。
上杉謙信が春日山へ帰ったのは、この年の六月下旬である。

両軍の出動

謙信としては、絶対に、この決戦で信玄を討つ覚悟をしていた。
今度のときのように、遠く小田原まで攻めて行くようなときには、うっかりしていると武田軍は越後まで侵入しかねないのだ。
こちらが出て行くと、信玄はさっさと引きあげてしまうし、留守にすると、また背後をおびやかす。いつまでもこのようなことをくり返してはいられないのだ。
一方。武田信玄も、あの〔海津城〕を修築し、ぞくぞくと精鋭部隊を送りこんで来

ている。

こうなれば、期せずして両軍の決戦場は善光寺平（川中島）一帯になることが明白となった。

信玄にしてもだ。

もし自分が大軍をひきい、一挙に京都へのぼろうとするなら、かならず謙信に背後をおびやかされるにちがいない。

信玄は、信州の地を攻めとるたびに、そこをしっかりと地がためをし、完全に、自分のものとしてから次へ手をのばすというやり方であったから、南信州はほとんど武田方の勢力に入ってしまっていた。

そこでいよいよ、

「上杉を討つ!!」

つもりになったのだ。

これまでに、上杉と武田は（川中島）において、三度の戦さをしていた。

一度目は、天文二十二年の八月で、このとき、川中島の南方へ進出した上杉軍が武田軍を追いのけている。

二度目は足かけ七年前の弘治元年の七月で、武田信玄もこのときは非常な意気ごみであったらしい。

十年ほど前に、日本へ渡来したポルトガルの鉄砲を、百挺も甲州からはこびこみ、上杉軍と対峙したものだから、さすがの上杉謙信も、武田信玄の財力の大きさを、

「底が知れぬ」

と、おどろいたそうだ。

このころの鉄砲は貴重な武器で、日本でも製作をはじめていたけれども、入手するためには莫大な金を必要とした。

この二度目の対決は、駿河の国の大守・今川義元が仲裁にのり出して来て、謙信と信玄はかたちだけの仲直りをしている。

三度目は弘治三年の初夏であった。

武田軍が、またも信州の侵略をはじめたので、上杉軍が出て行くと、さっと姿をかくしてしまい、秋になって謙信が春日山へ帰るや、風のごとくあらわれた武田軍が、たちまちに善光寺（現長野市）から戸隠神社までわがものとしてしまった。

その後。

善光寺は、上杉軍がうばい返している。

そして、今度は四度目の対決ということになる。

この年……永禄四年八月十四日の朝。

上杉軍は越後・春日山を発して、信州へ向かった。

総軍・一万三千（一万八千ともいわれる）であった。

上杉軍は、早くも十六日に善光寺へ入っている。現・長野市の善光寺である。

七世紀の末ごろに建てられたというこの寺の境内の丘には、横山城とよばれる上杉方の城砦が構築されてい、謙信は先ず、ここへ全軍をおさめた。

武田軍の前線基地ともいうべき〔海津城〕は、この善光寺から、さしわたしにして南方二里半（十キロ）のところにある。

海津城のすぐ近くにある尼飾山の砦にいた武田信繁（信玄の弟）は、信玄から、

「すぐさま、海津城へ合流すべし」

との命をうけ、海津城へ入って合計五千の兵力となった。

上杉軍の出動は、武田方の間者によってすぐさま、甲州・古府中の居館にいた武田信玄へ報告されている。

当時は、山から山へ、烽火（のろし）をあげてつぎつぎに知らせたもので、越後から信州へ、そして甲州の信玄の耳へ〔上杉軍出動〕のことがつたわるまでに四時間ほどであったという。

そこで武田信玄は、本軍の出発を命じ、古府中から出陣をした。

このときすでに、上杉軍は善光寺へ到着している。

善光寺平の〔平〕とは、山間の平地のことをさす。

現・長野市から見る善光寺平は、東西四里（十六キロ）南北三里（十二キロ）にわたる平地で、その南端・保基谷・高遠の山なみにつつみこまれたように見えるところに〔海津城〕がある。

そして……。

千曲川と犀川は善光寺平の両軍対峙するあたりで合流し、尚も北上して越後へ入っている。

この二つの川が合流するあたり、そのひろい中州が、いわゆる〔川中島〕なのである。

ともあれ、ひろい善光寺平を中にはさんでいるのだから、両軍は、たがいの行動を

手にとるように見ることができる。

これでは、たがいに小細工もできない。

堂々とぶつかり合わねばならぬ。

「去れば侵し、もどれば逃げる」

のかたちで、これまで上杉軍をあしらっていた武田信玄も、今度はみずから陣頭に立ち真正面から上杉謙信と戦うつもりだ、ということが、謙信にも、はっきりとわかった。

「信玄の首を、わしが討ちとる!!」

と、謙信は侍臣にいいきっている。その敵の総大将・信玄は、まだ決戦場にあらわれていない。

だからといって、むやみに〔海津城〕へ攻めかけることもできない。

すぐに落ちる城ではないし、城を包囲している間に、武田の本陣がうしろからあらわれて来たのではむしろ不利になる。

そうしたことよりも、このときの上杉謙信は、

「信玄があらわれてから、堂々と戦おう」

と、おもっていたろうし、信玄もまた、
「わしが出て行くまで謙信は手を出すまい」
と信じていたろう。
海津城をまもっているのは、武田信玄の嫡子・太郎義信である。ときに二十四歳。この人はのちに、父・信玄と不和になり自殺をとげてしまうが、永禄四年のこのときは勇気にみちみちた若大将であり、眼前に上杉の大軍を迎えてびくともせず、
「なにごとも父上の御指図にしたがえばよい」
悠々たるものであったが、八月二十日の未明となって、
「あっ……」
武田義信も、緊張せざるを得ないことになった。
この朝。
三日を善光寺に滞陣していた上杉謙信は、善光寺に残る部隊をのぞいた一万（八千余ともいわれる）の軍団をひきい、朝霧のたちこめる善光寺平へ進み出して来たのだ。
それは覚悟の前であったが、川中島を突切った上杉軍は〔海津城〕を横目にながめ

つつ、城の北東にある山地へのぼりはじめた。

（何をするつもりなのか……？）

城中の武田軍が息をのんで見まもるうち、上杉軍は悠然として侯可（そうべく）の峠をこえ、海津城のまうしろへ出て来た。

城を攻めるつもりではないらしい。

城を攻めるのなら、何もわざわざ山へのぼることはないのだ。

武田義信は、すぐさま急使を父・信玄のもとへ駈け向かわせた。

千曲川は背後の山なみに沿って西から南へうねり流れてい、その南へ十里のところに上田の城があり、武田信玄の本陣は先ずここへ到着することになっている。

昼すぎになると……。

上杉軍が山を下りはじめた。

海津城へいよいよ攻めかけて来るのか、とおもうと、上杉軍は城のうしろ千五百メートルほどのところを通過し、またも山へのぼりはじめる。

海津城のうしろ、東南西の三方の山地は、上杉軍の戦旗に埋めつくされたといってよい。

「おのれ!!」

ばかにしていると城内の武田軍は怒ったが、こちらは五千の兵力だし、しかも総大将・信玄の命令なくして出動するわけにも行かぬ。

「なれど、敵はどこへ行くつもりかな!?」

武田軍は、上杉謙信の意向がわからぬ。

上杉軍は、南から西へ山なみをすすみ、ついに夕刻、妻女山へとどまり、ここへ本陣をかまえたものである。

妻女山は海津城の西方わずか二キロのところにあり、海抜五百四十メートル。その山頂から山すそにかけて、上杉軍の旗やのぼりが森林のごとく押しならんだ。

つまり……。

善光寺平を中にはさんで向かい合っていた両軍はまるで肩をならべるかたちで善光寺平と川中島をながめているわけなのだ。

「ふうむ……」

と、武田義信がうなり声を発した。

さすがの彼も、上杉謙信の端倪すべからざるうごきに、のまれてしまったらしい。

同じ日の夕刻に、信州・上田へ到着した武田信玄は、

「敵は、わが腹中へ入った」

といい、しかも急がず、

「ゆるりと、兵を休ませよ」

上田へ滞陣をしてしまったものである。

武田家は源義光が甲州を朝廷からたまわってより、三百年もの間、甲斐の山国をまもりおさめてきていた。武田信玄は、それから十九代目の領主にあたる。

このとき、武田信玄がひきいる総軍は一万二千余。略、上杉軍とおなじ兵力といってよい。もっとも海津城にいる味方を合わせれば武田軍は一万七千余となるわけであった。

両軍の対峙

八月二十二日。

武田信玄は信州・上田を発した。

武田軍は千曲川に沿って北上する。

屋代のあたりをすぎると、右手に妻女山が見えてくる。
信玄も、これを横目で見やりながら、尚も進み、海津城へは入ろうともせず、善光寺平の西にある茶臼山へ陣をかまえてしまった。
上杉の本陣・妻女山から約二里の地点である。
こうなると、また状況がちがってくる。
上杉軍は、海津城の武田軍と茶臼山の武田軍にはさみこまれたかたちになってしまった。
だからといって、双方ともうかつに手は出せない。
いえば、剣術の名人が刀をかまえあってたがいに隙をねらい、呼吸をはかり合っているのと同じことなのである。
このまま対峙すること七日。
八月二十九日未明になって、ようやく茶臼山の武田本軍がうごき出した。
妻女山へ攻めかけるのかとおもうと、そうではない。
妻女山を通過し、ついに武田信玄は全軍を〔海津城〕へおさめたのである。
これから、また両軍の〔にらみ合い〕がはじまる。

九月となった。

現代の十月である。

信州の朝夕は冷気がきびしくなる。

冬も間近い。

いつまでもこうしていては、決戦の機をとらえぬうちに冬が来てしまう。

海津城の武田軍はともかく、妻女山の上杉軍にして見れば、いつまでもここに陣をかまえているわけにはゆくまい。

だが、上杉謙信は毎日のごとく、鼓を打ちならし、家臣を舞わせてたのしんだりしている。

心理的にはむしろ、海津城へ入った武田信玄のほうが、

(謙信は何を考えておるのか……?)

いくぶん、あせりを生じてきていたのではあるまいか。

上田から、この城へ入るまで、信玄は謙信をさそい出すために、わざと海津城を孤立させておいたり、自分が出て来てからも茶臼山へ本陣をかまえたりして、心理的には仕かけてきている。

いつもなら、
「おのれ、信玄め!!」
と、上杉謙信は烈火のように怒って突撃をして来る。
それが今度は、あくまでもゆったりと腰を落ちつけているのが、異様でもあり、不気味でもあったろう。
そして……。
ついに武田信玄は、
「こなたから仕かけてくれよう」
と、決意するに至った。
その作戦とは……。
全軍を二手にわけ、一手は約七千の編成とし、これを海津城代の高坂昌信（こうさかまさのぶ）が指揮し、夜半ひそかに城を出て山づたい（上杉軍が通った山道）に、妻女山の上杉本陣を襲撃せしめる。
山の中では、とてもじゅうぶんな戦闘は出来ぬ。
だから上杉軍は、妻女山を下って川中島の盆地へあらわれ、そこで、あらためて陣

形をととのえ直すにちがいない。

そのとき、武田信玄は別の一手――すなわち一万の本軍をもって川中島へ待ちうけ、あらわれた上杉軍へ突撃する。

そこへ、妻女山から高坂部隊の八千が下りてきて、上杉軍のうしろから攻めかかる。

上杉軍は〔はさみ討ち〕となるわけだ。

武田信玄が宿敵との大決戦にのぞむ最後の〔作戦〕が、これであった。

九月九日がきた。

この日。朝から霧のような雨がけむっていたが、夕刻には熄んだ。

しかし、冷えこみが一度に烈しくなってきた。

その夜の闇の中を、城外に陣をしいていた武田軍が少しずつ、ひそかにうごきはじめた。

敵は、わずか半里先にいるのだ。

あくまでもさとられてはならぬ。

うるしのような闇の中を、高坂昌信のひきいる八千の部隊が、海津城の背後の山へ

のぼりはじめる。

進路は、多田越えの山道から大きくまわりこみ、妻女山の南方の尾根へ出て、一気に上杉の本陣へ攻めかけようというのである。

このとき……。

上杉謙信は、妻女山から半里の彼方にある海津城から立ちのぼる炊煙を見て、早くも武田方の作戦を見やぶったというが……さて、どんなものであろうか。

武田信玄という名将が炊事のけむりによって、わが作戦を敵将に見やぶられる、などという失敗をするわけがない、と筆者は信じている。

上杉謙信もまた、長い滞陣にしびれを切らし、冬の近いのを知って、

「もはや、これまで」

偶然にこの夜、越後へ引きあげるために陣をはらい、妻女山を下ったのではないか……。

または、謙信も、

「こちらから仕かけよう」

として、同じ夜に山を下ったものか……。

または……。

妻女山の南方へ配置しておいた見張りの者がいち早く、高坂部隊が迫るのを知って急報をし、謙信は信玄の作戦を見やぶったものか……。

どちらにせよ……。

上杉謙信は九日の亥の刻（午後十一時ごろ）すぎに、これもひそやかに妻女山を下りはじめている。

それにつれて、上杉軍の前方を警戒する見張りの間者もうごき出した。

彼らは、間もなく武田信玄の本陣が海津城を出て、川中島の八幡原を中心に布陣しつつあることを探り、これを上杉謙信へ報告したものであろう。

これをきいたとき、

「よし!!　いまこそ……」

謙信は、闘志に身ぶるいをしたことだろう。

三手に分かれて十二か瀬と狗が瀬のあたりから千曲川を押しわたった上杉軍は、ついに川中島の盆地に全容をあらわした。

九月十日のあかつきを迎えて、山も野も、ふかい霧につつまれている。

八幡原の信玄本陣を一里の彼方において、上杉軍は濃霧の中をひたひたと進みはじめた。

血戦

この日の上杉謙信の武装は、紺糸おどしの鎧に萌黄どんすの胴肩衣をつけ、金の星兜の上から〔白のねり絹〕をもって行人包みにしていた。

放生月毛とよばれる愛馬にまたがり、右手に青竹の指揮杖をつかんでいたといわれる。

上杉方の間者が、霧の中をさいわいに武田軍のうごきをさぐり出し、次々に謙信へつたえてくる。

それによると……。

八幡原の武田軍は、妻女山から下りて来る上杉軍にそなえ、陣のかまえを南に向けているらしい。

ところが、すでに上杉軍は妻女山を下り、川中島盆地へ出て前進をし、八幡原の西方へあらわれていたのだ。

つまり、敵が自分の正面ではなく、右手へ出てきていることを武田軍はまったく知らない。

川中島にたちこめた濃い霧は、すべてをおおいかくしてしまっている。

このころ、妻女山を奇襲すべく、山づたいに進む高坂部隊は、妻女山の上杉陣地に〔かがり火〕がつらなっていることを知り、

「しめた!!」

と、おもったろうが、これはわざと上杉軍が火を燃やしておいたもので、いざ妻女山へ攻めかけて見ると、人影一つない。

今度は、

「しまった……」

である。

そのころ……。

上杉謙信は全軍をひきい、乳白色の霧の幕をぬって、武田本陣をへだてること半里の地点まで迫っていた。

こうなると、武田軍も、

（どうもおかしい？）

と、おもわざるを得ない。

武田軍の見張りも、川中島の諸方へ出ている。

これらが、

「何やら西の方に軍勢がうごいている。味方ではないらしい」

といい出した。

本陣の武田信玄も、

（おかしい？）

と、おもった。

予定通りなら、妻女山の方向から戦闘の響めきがきこえてくるはずなのである。

武田信玄は、入道あたまへ諏訪法性の兜をいただき、黒糸おどしの鎧の上に緋色の法衣をまとい、軍扇を片手にして、

「巌のごとく……」

本陣の床几にかけ、身じろぎもしなかったが、

「西方にうごいている軍勢は、上杉軍のように見うけられます」

との報告をうけるや、ただちに陣形をととのえ直すよう、命令を下した。
伝令が諸方へ飛ぶ。
馬がいななき、霧がながれはじめた。
このとき……。
ようやく、武田軍の前へ肉迫して来た上杉謙信が、
「かかれ!!」
青竹の指揮杖をふるって、総攻撃の火ぶたを切った。
武田軍は、もう陣形をととのえ直すひまがなかった。
したがって、南に向けていた陣形の最後部にあった信玄の本陣は、最右翼となって上杉軍を迎え撃つことになったわけである。まことに不利だ。
幾重にも深くきざんだ陣形を、南へ向けてのまま西へ向けたわけだから、だらだらの一重の陣形になってしまった。
そこへ……。
……わあ……。
ようやく、朝風に吹きはらわれはじめた霧の中から、上杉軍が錐をもみこむように

突撃して来た。

武田の本陣は、瞠目（どうもく）をした。

「いつの間に……？」

である。

敵の本軍が、眼前に肉迫していたのだ。

こうなれば、高坂昌信ひきいる八千の別手が、妻女山を下って、敵のうしろへ攻めかかるまで、なんとかもちこたえねばならぬ。

かたちからいえば、これは信玄の作戦通りなのだ。

しかし、時間が狂った。

一刻（二時間）も早く、上杉軍が進出して来たからである。

「兄上。それがしは出ます」

信玄の弟・武田信繁はただちに手兵をひきいて、本陣から去った。

信繁は賢明な武将で、信玄の父の信虎は、むしろ、弟の信繁を武田の後つぎにしたかったらしい。

ところが信玄は、父・信虎を駿河の今川家へ追いはらってしまい、武田の当主とな

った。

信繁は、この兄によくつかえ、決して、自分の派閥をつくろうとせず、武田家のためには骨身を惜しまずにはたらいてきている。

今度の出陣に際して、信繁は、紺色の母衣と髪の毛を切って家臣の春日某へわたし、

「これを、古府中にいる我子の音豊へ形見にわたしてくれ」

と、たのんでいる。決死の覚悟をきめていたのであった。

いかに霧がふかかったとはいえ、武田方でも絶えず、見張りの間者を出していたのだが、これらのほとんどが、上杉軍の見張に捕えられたり、斬殺されたりしてしまったものらしい。

ともあれ、上杉軍の行動はあまりにもタイミングがよすぎた、といえよう。

すでに、朝である。

開戦を知らせる銃声が、ひとしきり鳴りわたったのちは、ほら貝が鳴りひびいて、武田軍が必死に陣形をたて直し、上杉軍の突撃をふせぎはじめた。

霧が、ぐんぐんとはれてゆく。

上杉軍は、三本の帯のような体形をとり、まっしぐらに、八幡原の武田本陣へ突き進んで来る。

この帯の両がわと、前方から、武田の諸部隊が猛然と迎え撃った。

上杉謙信は、三本の帯の中央にいて、

「かかれ、かかれ!!」

いまや青竹の指揮杖を捨て、長光(ながみつ)の太刀をぬきはなって進みに進む。

武田軍は、なんとかして、この上杉軍の陣形をくずそうとするのだが、なかなかに総大将・謙信の近くへは寄りつけない。

両方ともに、

「天下第一」

を自認する強兵であるから、すさまじい戦闘がおこなわれたにちがいない。

上杉方の先鋒は、柿崎和泉守で、

「兜を伏せよ。顔を上ぐるな!!　敵勢を見ずに突きかかれ!!」

と命じ、

「戦うのは敵勢の中へ飛びこんでからにせよ!!」

物凄い突撃ぶりを見せ、武田方の山県・穴山の両部隊を突きくずした。

「一刻じゃ。一刻をもちこたえよ」

武田の本陣方は、いのるように、別手の八千が妻女山から下りて、敵軍のうしろへつくのを待ちに待ったが……。

「うわあ……」

上杉軍の先鋒は、信玄本営のすぐ前に出ていた望月部隊へ、もみ入りこむように攻めかけて来た。

そのころ……。

武田信繁は壮烈な戦死をとげている。

そこは、川中島の水沢付近の小さな流れの中で、現在、その近くに典厩寺という小さな寺がある。武田信玄が弟・信繁のために建立した寺だといい、信繁の墓もある。

武田の本陣の位置を知った上杉謙信が、旗本三十騎ほどをしたがえ、みずから信玄の首をねらって殺到したのは、それから間もなくのことである。

魔神のような襲撃であった。

信玄の本陣のまわりは手うすになり、すぐ近くまで押しつめて来た上杉軍を必死で

ふせぐ武田軍へ、信玄の旗本までが加わっている。

「あっ……」

という間もなかった。

混戦の渦の中を走りぬけた上杉謙信が、八幡原の武田本陣へ疾風のごとく駈けこみ、

「晴信、覚悟!!」

馬上から信玄へ斬りつけたものである。

左手に手綱をさばき、馬をあやつり、謙信は馬上から閃々なる斬撃を加えるのだが、床几から腰をあげぬ信玄へ、いまひとつ、太刀先がとどかぬ。信玄は軍扇をもって応戦した。謙信の太刀がその軍扇を二つに切り飛ばした。

そこへ……。

信玄の旗本・原大隅が駈けつけ、謙信の馬の尻へ槍を突きこんだ。

馬放生月毛が狂奔した。

こうなっては、いかぬ。

どっと、信玄の旗本たちが駈けつけて来るのを尻目に、上杉謙信は本陣から駈け去

った。

夢魔のような一瞬であったといえよう。

これが、決戦のピークであった。

午後十時ごろ……。

妻女山へまわった別手の武田軍が血相を変え、ようやくに川中島へ駈けつけて来た。

この新手の八千にうしろへつかれたのでは、上杉軍も勝目はない。

「もはや、これまで」

すでに三分の一の兵力をうしなっていたし謙信も撤退の命令を下さざるを得なかった。

今度は、上杉軍が苦戦となる。

上杉軍は、八幡原の北面を東へぬけ、引きあげて行ったのだが、犀川の急流をわたるとき、武田軍の新手に追いつかれて戦傷者が続出したという。

だが、謙信はぶじに戦場を離脱し、兵をまとめて春日山へ引きあげて行った。

上杉軍の戦死者は三千五百余。

武田軍は四千。

負傷者に至っては数えきれない。

この大決戦は、双方に何の利益をももたらさず、たがいに多大の犠牲をはらったのみで終わった。

ばかばかしいといえばそれまでだが、上杉謙信と武田信玄が、たがいに阿吽の呼吸をはかり合い、名将の智能と感覚をしぼりつくし、しかも、総大将同士の一騎打ちがおこなわれたという……あえていえば〔戦争芸術〕の粋を見せたという点で、関が原や姉川、小田原、その他の戦役にまったく見られないものをもっている。こうした合戦は、この〔川中島〕を最後とする。

鉄砲という新兵器も出てくるし、戦争が政治的になってくるし、戦国武将のこころも功利的に変わってきて、したがって戦争のかたちも純粋なものではなくなってくる。

強いていえば、五十余年後の大坂戦争で、徳川の大軍に切り入った真田幸村の奮戦が、やはり後年のわれわれから見て〔戦争芸〕の華におもわれる。

川中島の決戦では、幸村の祖父にあたる真田幸隆が、武田軍の部将として参加している。

関ヶ原古戦場を往く

変貌した古き街

これまでに、関ヶ原の古戦場を何度も訪れている私だが、雨の関ヶ原を見たのは、はじめてであった。

もっとも、新幹線が開通する前の東海道線では、関西への往復に、数え切れぬほど、関ヶ原の山間を通り、車窓からの景観を、雪の日、雨の日に見てきている。

列車が、岐阜を過ぎ、青空がのぞいている早春の昼下りなど、関ヶ原の山間に入ると、たちまちに日が翳り、伊吹山から吹きおろす雪が車窓の外を冬の景色に変えてしまうことなど、しばしばであった。

それほどに、関ヶ原の天候はさだまらぬ。

この日。

私どもは午後一時ごろに、新幹線〔こだま〕で岐阜羽島駅へ着くはずであった。

それが、名古屋駅で停車した〔こだま〕は、なかなかに発車しない。京都大阪間で〔ひかり〕が故障し、全線が停電になってしまったという。復旧は約二時間ほどで、その間に、すこしずつ、ノロノロ運転で各列車を進めることになった。

そのうちに、ホームの反対側に停車していた〔ひかり〕が発車することになった。

若い車掌が飛んで来て、

「向うのひかりが羽島へ停車しますから、お移りになったほうが早いですよ。さ、早く早く……」

と、私どもの旅行鞄をつかんでホームへ出て行った。

「それはありがたい」

というので〔ひかり〕へ乗り移ったのだが、いざ羽島へ着いて見ると〔ひかり〕のためのホームがない。あとから考えれば当然のことなのだが、ホームがない以上、ドアは開けられぬと〔ひかり〕の車掌たちがいう。いずれにせよ、かの〔こだま〕の車掌の親切から出た失敗であったから、いろいろと親切にはからってくれたがどうにもならぬ。ついに、午後三時に京都駅まで持って行かれ、そこから羽島駅へ引き返したときには、四時近くになっていた。

羽島から自動車で、大垣へ向う。

どんよりと曇ってはいるが、うすあかるい初夏の夕暮れのことである。

明日、あらためて取材をすることにしても、

「とにかく、関ヶ原を通りぬけて見よう」

と、私は同行のN君にいった。

大垣市の西方、さしわたしにして約一里のところに、美濃の国不破郡赤坂の町（現大垣市赤坂町）がある。

十五年ほど前に、大垣から赤坂へ車で出たことがあったけれども、途中の景観は、むろん変貌している。古びた道、古びた家々が打ちこわされ、ひろく新しい道には大小の車輛がうなりを発して疾走し、新しい家並には、ところせましと種々の看板が林立している。

これは、赤坂や垂井の町も同様であって、わずか五年ほど前、関ヶ原から垂井へ出たときには、まだ色濃く残っていた宿場町のおもかげは、車輛と看板の群の底に埋没しかけてい、私は、おもわず、

「ここは何処」

と、運転手にきいて、

「垂井ですよ」

そういわれたときには、わが眼をうたぐったほどであった。

家康大勝利の名残り「御勝山」

大垣の市街を出はずれ、すこし行くと杭瀬川のほとりへ出る。

この川をわたると、すぐに赤坂の町だ。

関ヶ原戦争のとき、赤坂に本陣を置いた徳川家康の〔東軍〕と、大垣城を本陣とした石田三成の〔西軍〕は、杭瀬川のながれをはさんで対峙したわけだが、小戦闘がおこなわれなかったわけではない。

慶長五年九月十四日（現代の十月二十日にあたる）の午後。

杭瀬川において東西両軍の戦闘があった。

この日、東軍の総帥・徳川家康が、はじめて赤坂の本陣へ到着したのを知り、石田三成の寵臣・島左近が、西軍の士気を鼓舞するためもあって、

「それがし、出てまいる」

といい、僚友・蒲生郷舎などと共に部隊をひきい、大垣城を出て杭瀬川のほとりへ出撃した。

それは、赤坂の町外れにある岡山という小丘陵にもうけられた東軍本陣の、すぐ真

下といってもよいほどの至近距離だったものだから、東軍の中村一栄・有馬豊氏の二将が、おもわずさそいこまれ、川をわたって西軍へ攻めかけて行った。

待ちかまえていた西軍部隊は、これを迎え撃ち、さんざんに打ち破ったものである。

折しも岡山の本陣へ到着した徳川家康は、これを展望し、

「大事の前に、あのような小戦をなし、兵を損ずるとは何事か……」

吐き捨てるようにいい、すぐさま令を下して東軍部隊を撤収せしめたという。

家康は、東軍の諸部隊が尾張の清洲城へ集結をし、十日後に岐阜城へ立てこもっていた織田秀信（信長の孫）を下し、岐阜を占領し、赤坂へ進出したのち、ゆるゆると江戸城を発して戦場へ向ったのである。

前日の十三日に、家康は岐阜城へ到着し、一泊した後、ようやくに岡山の本陣へ姿をあらわしたのであった。

当時、岡山とよばれていた小高い丘を、いまは〔御勝山〕と、このあたりの人びとは呼んでいる。これは家康が関ヶ原に大勝利をおさめ、天下の覇権をつかみ取ってのちに、名づけられたものであろう。

〔御勝山〕は、いまも当時のままに残っている。観光客が押しかけるでもなく、切りくずしたところで、現在は何の利用価値もない小さな丘だから、こうして往時をしのぶ姿を、われわれに見せてくれるのだ。

この丘の上に立つと、晴れている日なら、大垣城の天守閣が手に取るようにのぞまれるのだが、今日は、いまにも泣き出しそうな夕暮れの空に煤煙がたちこめていて、ほとんど見えなかった。

煤煙といえば、赤坂の町の北面にそびえる金生山からは、江戸時代から大理石が切り出されてい、いまは大小の工場が採石場をもち、公害問題が起っているそうだ。

「ここの大理石工業は、東洋一ですよ」

などと、地元の人びとはいう。

赤坂から垂井へかかる旧中山道には、美しい松並木があったが、いまは、その姿も石灰と煤煙にまみれつくしてしまっている。

私たちの自動車は、いっさんに赤坂の町を走りぬけた。

雨の桃配山

関ヶ原の決戦がおこなわれたのは、徳川家康が赤坂の本陣へ到着した翌日のことである。

敵軍の前へ姿をあらわすや、家康は一気に、決戦へもちこんだのであった。

ときに家康は五十九歳になっていたが、その気魄は凄まじいものがあったといえよう。

「このまま、全軍をひきい、一気に大坂へ向うぞ」

と、家康はいいはなった。

大垣にあつまる〔西軍〕などは、

「かまわぬ」

と、いうのだ。

それよりも一気に関ヶ原を抜け、西軍の本拠であり、豊臣氏の本拠である伏見・大坂の両城を、

「攻め落してしまおう」

と、いうのである。

この作戦を、家康は大垣の西軍の耳へ、わざと〔筒ぬけ〕にさせた。

折しも、大垣城では、家康本陣への夜襲強行をめぐって作戦会議がひらかれ、諸将の間に烈しい論争がおこなわれたようだが、総帥・石田三成は、ついに〔夜襲決行〕へ踏み切れなかった。

そのうちにも、東軍が赤坂を出発する気配が濃厚となってきた。

至近距離に対峙していることだし、家康が巧妙に、

「大坂攻めへ出発」

のことを、露骨に見せたものだから、ついに三成は、

「家康に先んじて関ヶ原へ至り、西上する東軍を待ちかまえ、いっきょに事を決しよう」

と、断を下したのであった。

夜である。

雨がふりしきっていた。

三成の古くからの友人で、西軍の一将であった小西行長は、このときの三成を評し

て、

「治部殿は何から何まで疎漏なく運ぼうとする。それは結構なれど、戦さには魔性というものがあり、これに立ち向って勝利を得んがためには、書状をいじり政令を案ずるようなわけには行かぬこともあるのだ」

と、いっている。

西軍が大垣城を発したのは、午前零時すぎであったろう。西軍は、大垣の西方二里のところにある南宮山の南麓を迂回し、山間の道を関ヶ原へ入り、全軍約十万の兵力をもって布陣を完了した。ときに午前三時頃か……。

南宮山には、西軍の毛利・安国寺・吉川の諸部隊がいる。

関ヶ原で戦闘がはじまったとき、この三部隊が山を下り、東軍の背後から襲いかかるはずになっていた。

徳川家康の東軍が、一足遅れて赤坂を発し、垂井へ入ったのは、西軍の布陣が終った同じ頃ではなかったろうか……。

東軍は西軍と反対に、南宮山の北面を西上した。

南宮山の山つづきに〔桃配山〕という突起点がある。

家康は、先ずここに〔本陣〕をかまえたのだ。

私が、垂井の町から、東軍が進んだ道をたどって関ヶ原へ入ったのは、これで二度目である。

垂井を出て、街道の右手前方に、桃配山の小さな姿を見るときのイメージは、興味がつきぬものがある。

このあたりの景観は、変貌したといっても、地形的に往時をしのばせるものが、まだ残されているからだ。

〔徳川家康本陣〕の石碑が立てられた桃配山の裾から、その本陣址までは五十メートルほどの、ゆるいのぼりで、まわりは深い木立だ。

私は、ここへのぼり、いま通り抜けて来た垂井方面をふり返って見た。

街道の松並木が遠く見え、西方から北面にかけて、伊吹連山がせまっている。

雨が、ふり出してきた。

桃配山は小さな突起点であるけれども、前面にひろがる関ヶ原を展望するのには、ちょうどよい。

いまは木立にさえぎられて、展望がきかぬが、当時も、この程度の木立はあったろ

う。

家康は、その木々を切り払わせたと見てよい。

桃配山・本陣の後方から垂井にかけて、家康は、有馬則頼、山内一豊、浅野幸長、池田光政の四部隊を残しておいた。

これは南宮山の西軍三部隊に備えるためで、同時に家康は、この毛利秀元を主軸とする西軍へ、

「こちらに味方をしなさい。そのほうが御為じゃ」

しきりに、内応工作を開始していた。

そしてついに、南宮山の西軍は戦闘に参加しなかったのである。このため西軍の作戦は大きな齟齬をよぶことになるのだ。

こうして徳川家康は、関ヶ原の東面から、北西南の三方に展開した西軍と向い合ったわけである。

雨が強くなり、ほとんど展望がきかなくなった。

「もう、いけませんね。明日、出直して来ましょう」

と、N君がいった。

私は、同意した。

決戦の日をしのばせる冷雨

関ヶ原は伊吹の高峰に西北をはばまれ、西は今須から南北につらなる山脈にかこまれた一方里半の小盆地である。

この山峡をぬって、中山・北国・伊勢の三道が通じている。

せまい盆地の中へ、両軍が投入した兵力は、たしかなことはわからぬが、合せて十六、七万ではなかったか。

その大軍がもみ合い、押し合い、芋を洗うような混戦の火ぶたを切ったのは、翌十五日の午前八時ごろであった。

私どもが、つぎの日に関ヶ原へもどると、やはり、天候はすぐれない。

灰色の密雲がたれこめていて、その雲の隙間から時々だが、うすく陽が落ちてきた。

N君と私は、急いでカメラのシャッターを切った。

関ヶ原の町から、伊吹山に向って北国街道をすすみ、左へ切れこんだところに、

〔ウォー・ランド〕

なるものがある。

ひろい敷地へ、東西両軍の陣形を示し、そこへ、家康や三成をはじめ、参加した諸将のセメント人形がならんでいる。

なんとも奇妙なものである。

事務所からは、スピーカーで戦闘の響音をながし、講談調の説明によって、絶えず関ヶ原合戦の模様がテープによって語りつづけられている。

見るべきものといえば、事務所の展示室へおさめた武具などの陳列品であろう。

この〔ウォー・ランド〕へ来たのは、たしか今度で五回目になる。

五年ほど前に来たとき〔ウォー・ランド〕の左手の小さな湖水に面して〔ホテル・関ヶ原〕が出来ていたのに、びっくりしたことがあった。

「関ヶ原も変ったものだ」

と、おもわざるを得なかったからだ。

戦後はじめて関ヶ原を訪れたときは、往年の中山道の一宿駅といった感じが充分に残されてい、町の旅館へ泊ったとき、その夜の深く濃い闇のひろがりに、息をのんだことをおぼえている。

〔ホテル・関ヶ原〕もまた、変貌していた。

本屋につづいて、レストランや売店、さらに水上ゴルフなどの娯楽場が出来ている。

天候の故と、週日のためもあってか、ホテルにもウォー・ランドにも人の気配がなかった。

いま、関ヶ原町では、合戦の遺跡を、此地を訪れる人びとにわかりやすく見せようというので、いろいろに手を加えはじめている。

私が、はじめて来たときは、戦史の地図をひろげながら、笹尾山の石田三成本陣をはじめ、濃霧のはれやらぬ間に戦端の火ぶたが切って落された丸山の山腹の道をたどったりしたものだ。

戦況は、午前中は西軍優勢のうちにすすめられたが、午後になって、松尾山に陣していた西軍の小早川秀秋などの諸隊が、徳川家康に内応し、俄然、山を下って西軍めがけて突撃したことによって、戦局は一変し、ついに西軍は総くずれとなり、総帥石田三成は身をもって伊吹山中へ脱出した。

そして最後に、戦闘に加わらず陣をかためていた西軍の将で、薩摩の島津維新の勇

猛果敢な退却戦をもって、関ヶ原の決戦は幕を閉じることになる。

私どもが、関ヶ原駅の北面、陸橋をわたって北国街道へ入る右側にある陣場野にいると、がっしりした体格の青年があらわれ、熱心に、写真を撮りはじめた。

陣場野は、決戦の当日、徳川家康が午後になってから、桃配山から進出し、本陣を移した場所で、戦いが終ってのち、西軍の首級を実検したところでもある。

松の木立にかこまれた石垣の上に、徳川家康床几場の石碑が建てられ、久米幸叢の、

〔夏山に、かこまれてここ関ヶ原〕

の句碑もある。

カメラを構えている青年に、私がはなしかけると、青年は、九州・鹿児島の出身で、これから東京へ就職が決まって行く途中、関ヶ原を訪れた、と語った。

そういえば、戦史に残る退却戦を敢行し、むらがり寄せる東軍の中を突破し、約一千の部隊の大半を失ないつつも、みごと切りぬけて脱出した島津維新（義弘）は、鹿児島の〔殿さま〕であったのだ。

「小学生のころから、ぜひ一度、関ヶ原へ来たいとおもっていたのです」

と、青年はいった。

これから、島津部隊の退却路である鳥頭坂から伊勢街道を徒歩で、伊勢の桑名まで、

「行って見るつもりです」

という青年に、私は、陣場野から北国街道をすこし行ったところにある〔島津維新陣所ノ址〕まで案内をし、そこで青年と別れた。

それから、東海道線に沿った道を歩き、宮ノ上の西軍・大谷吉継（おおたによしつぐ）陣所址と、その奥の、木立と草に埋もれた吉継の墓へ詣でた。

大谷吉継は、病軀をおして、親友・石田三成のために出陣し、松尾山の小早川軍の内応を知ってこれを迎え撃ち、悲愴な最期をとげたのである。

私どもが、大谷陣所址から、東海道線の線路をへだてて松尾山をのぞむとき、沛然（はいぜん）と雨が叩いてきた。

「さっきの青年、これでは、ずぶぬれになってしまうね」

いいながら、私はあわててN君と、自動車の中へ飛びこんだ。

そういえば決戦の日。戦い終って夕暮れとなったとき、冷めたい秋の雨がひとしきり烈しくふりしきったという。

豊臣秀吉

聞き手
三国一朗（随筆家）

三国　豊臣秀吉というものを特に取りあげてお書きになったことはおありですか。

池波　主人公ではなくてね。ほかの戦国時代の話に秀吉はずいぶん……。

三国　戦国時代は何をお書きになっても、どこかに秀吉という存在は出てくるんでしょうね。

池波　ことに戦国時代の後期はね。一番いろんなでき事が起きた後期の場合には、信長と秀吉が一番活躍しますからね。

三国　秀吉も、六十二歳でこの世を去ったというのですから、まあ早くから偉くはなりましたけど、いまからいえば若死のほうですね。

池波　いまの年齢からいうと若死だし、秀吉は、自分で寿命をちょっと縮めたようなところがあるんじゃないかと思いますね。

三国　そうでしょうか。

池波　そういうところが非常に多いとぼくは思います。苦労を苦労としない人ですからね、信長に仕えていた頃は。信長に仕えていた頃はたえず忙しく動き回って、ほとんど休みもなしに働きつづけ、天下を取ってからも休みなしに動き回り、天下を取ったら気持をゆったりと家康みたいに落ち着けて、自分の後継者をつくって天下

を平和に導くという、そのゆったりした気分にならないで、一種の生理的な肉体的な反動で、ジッとしていられないんですね。何かしていなきゃ……。

それがために、朝鮮戦争をはじめたことによって——まあ、それが戦果ははかばかしくなくとも、直接日本が攻められたわけじゃないのですから損害は少ないんだけれども、あの忙しいさなかに感情とショックがあい次いで起こるわけですよ。

つまり、朝鮮戦争がはじまって、自分が九州の名護屋へいきますね。

三国　そうですね。

池波　そしてすぐに、大政所——自分の母親が亡くなるでしょう。亡くなったんで、帰ってきて、悲しんで慟哭したといいますね。そしてまたこんどは、名護屋へいくと子ども——秀頼（ひでより）が生まれた。今度は喜びですよね。うれしくて、その感情にゆさぶられて、またまた大坂なり京都なりに引き返してくる。その次には、自分があとを譲ろうと思った秀次が、事件が起きて切腹させなければならない。そういう、いろんな感情の起伏の激しい晩年になったものだから、相当、心身をさいなまれたということじゃないかと思いますね。

三国　感情のメーターの針が振り切れたという感じがしますね。

池波　ぼくはそういう気がします。

三国　そういうふうに、いつも何かしていなくちゃいけない。自分の喜怒哀楽を一〇〇パーセントにいつも活動させているという性分は生まれついてのものなんでしょうか。

池波　ぼくは生まれついてのものというよりしょうがないと思うけれども、まず、少年の頃に信長に仕えて以来、信長に気にいられるためにはそういうふうに働かなければならないわけですからね。そのなかの一番の働き者であって、一番のお気にいりだったわけだから、その生理的なリズム感というか、スピード感というかな、忙しさというものは、なくなっちゃうと落ち着いていられないような……人間てものは案外そういう、肉体的生理的な条件がいろんなものに作用してるんじゃないですか。大事件にね。

三国　大事件に。それにしても朝鮮への戦争はともかくとして、国内での戦いになりますと、やはり秀吉は戦い上手ということは定評のあるところじゃないでしょうか。

池波　それは一番じゃないでしょうか。出血を非常に嫌う人ですからね。敵の出血も

嫌い、自分の味方の出血も嫌って、政治的に、あるいは戦略的に敵を降服させる。これは秀吉のモットーですがね。

三国　機略縦横というところですね。

池波　若いときから、あまり、血を流して残酷な戦いをやることは好まないですね。信長と違ってね。

三国　そこのところは大違いですね。

池波先生は、彼の、長いといえば長い、短いといえば短い一生のなかで、どの時期に一番興味をお持ちになりますか。やはり天下を取ってからですか。

池波　天下を取ってからも興味を持ちますね。いままでの秀吉のほがらかな性格から、思いもかけないドラマがはじまるので興味がありますけれども、秀吉が一番秀吉らしいというのはやはり、小田原戦争のあたりでしょう。小田原戦争というのは秀吉の本質が最もよくあらわれているんじゃないですか。遊び半分の戦争ですから（笑）。だから血を流さないでしょう。遊び半分でやっつけてやろうということですからね。

三国　遊び半分で血を流さずに天下の統一が成れば、こんなおもしろいことはありま

せんね。

池波　だからおもしろかったんじゃないですか。石垣山に城を築いて、すっかり御殿を建てて、自分のみならずほかの大名にも、みんなお妾さんを招んでいい、と。愉快にやって敵の来るのを待とう、降伏するのを待とう、ということでしょう。そして実際その通りになっているわけですからね（笑）。

三国　ちょっと例がありませんね。

そういう全く陽気な、無邪気といえば無邪気かもわかりませんが、あけっぴろげなところは、ほんとに秀吉の性格のいい面ですね。

池波　そうですね。

三国　ですから自然に大衆の人気も集まるし、へんに策略をめぐらさないところに魅力があるのかもしれませんね。

池波　表側からみるとそうだけども……つまり、そういうふうにして遊び半分で勝つがためには策略家なんです。裏にまわっての勝つための策略は大へんな知略家ですね。

三国　あきらかに二つの顔がありますね。

池波　ええ。その知略というものは、秀吉の場合は戦争において発揮されるわけです。平和時の戦争においてはどうも、ね。といっても平和になってからの政治家としての秀吉というのは、天下を取って死ぬまでほとんど戦争があったわけですから、晩年のほんの一時期だけですけどね。そのときには秀吉の知略というものはみられないですね。戦争における知略家、政治家ですね。

三国　家康とは、そこのところがちょっと違いますね。

池波　全然違うんじゃないですか。家康も信長父子が死んだ途端に、いずれは自分が天下を取らなければならないと決心しておりますね。だけども、秀吉がどの程度、豊臣の政権をやるかということを見ながら、ジリジリ進んできて、自然に、豊臣家がもうダメだというみきわめがつき、こんなぐあいではとても続かないと……。

三国　家康としては当然そうでしょうね。

池波　ええ。ということで着々と自分が天下を取ったときの後継者（秀忠）の育成――そういうものも、自分が朝鮮の戦争に出るときや、九州の名護屋へいくときには、秀忠をその時分から江戸へ残して政治をさせるようにしておりますね。だから、二代将軍の秀忠というのは、少年の頃からそういうふうにされているので、非

常に……。

三国　有能な政治家に成長しましたね。

池波　はい。

三国　戦上手で天下を統一した秀吉ですけれども、同時にまた、桃山の文化というものをひとつ形成するうえの功労者としても認めなければいけませんね。

池波　もう、絶対認めないといけない。そういう意味では、かの一番ひどい政治家であった――もっとあとになりますけど、忠臣蔵のときの将軍・犬公方……。

三国　綱吉……。

池波　綱吉ですら、元禄文化は認めなければならないということになりますからね（笑）。

三国　秀吉という人の、何ともいえない華やかなあかるい性格というものがあるんじゃないでしょうか。

池波　むろんそうです。ただ、あかるいものといっても、けばけばしい田舎じみたということじゃなくて、あれだけ芸術的な感覚に恵まれていた信長のそばにあって、若いときからいいものを見てきて、目を鍛えておりますからね。当代一流の建築家

であり、土木工事家であるわけですよ、秀吉は。また、秀吉に鍛えられた加藤清正も自然そうなるわけです。

三国　築城家ですものね。

池波　そういう能力は大へんな人でしょうね。街をつくるやり方とか、城をつくる……そういう意味では大へんなものですよ。

三国　生まれからいえば、お父さんの名前もはっきりしないような、きわめて軽い身分の出身ではありながら、そしてまた風采のあがらない人だということを考えても、実際は大人物ですね。

池波　だと思います。でも、生まれのことも、名もない百姓の子となっておりますけれども、これは、わからないんですよ。

あるいは百姓といっても、京都のお公家さんでも何でもひどい人はみんな百姓になっている時代ですからね。ですからいちがいに……。たしかに生まれたときは貧乏な家に生まれたんだけれども、先祖を辿ってみるとそうじゃないという研究をしているかたもいらっしゃいますね。

三国　そうですか。

池波　それで、何かやることが下卑てないんですよ。

三国　下卑ていてよさそうですがね。

池波　そうなんだけども、やることがね。なんか、血筋がそんなに悪い人じゃない気もしますね。

三国　池波先生はそういうふうにお考えになりますか。

池波　そういうような考えにこの頃なってきました。はじめはそうじゃなかったけど。

三国　さっきからちょっとお話に出ている、いわゆる朝鮮出兵ですね、あれはほんとうはしなければしないですんだものなのでしょうか。

池波　もちろん、しなければしないで……。

三国　やっぱり……。

池波　完全にしないですんだ。むこうはとにかく、力が明国に圧迫されていた時代ですからね。朝鮮がこっちへ襲いかかってくることはもちろんないし、無礼なまねをしたわけでもないんですよね。ただ、信長の時代から海外雄飛のことが頭にあるから——。信長は海外にいろいろ目を開いて知識を吸収していた人ですからね。

三国　そうですね。

池波　だから、よくいってますよ、秀吉が中国征伐をしたらお前に中国をやる、といったら、いや、中国はいらない、わたしは今度むこうへいって明国をいただきます、なんていって（笑）、たしかにいってたらしいですよ（笑）。だから、その頃からの夢であったんでしょうけどね。

三国　ですから、朝鮮出兵はほんとうに命取りではありましたが、運命的な一つの政略でしたね。

池波　そうです。しかし、完全に勝つという自信もあったかどうかということは、名護屋の本陣の大名の陣所の配置なんかを見ると、家康なんかを、朝鮮の戦争がうまくいかなかった場合に諸大名の反乱が起こるといけない、そういうので一番こわいのは徳川家康だ、ということで陣所の配置をしたとよくいわれておりますがね。だから、はじめから万全の自信を持っていたんじゃないけど、やっぱり何かモノに憑かれたように、やらなきゃちょっとおさまらなくなってきたんでしょうね。

　子どもは死ぬ、自分の義弟は死ぬ、何を頼りにしていいかわからない。あとはどうなるのだろうということを考えると、イライラしてくる。やっぱり何かせずには

いられなくなってくる、ということだったんだろうと思いますね。人間、気をつけなければならないのは晩年になってからですよ（笑）。

三国　何かにとり憑かれることがありますからね、老年におよんで。あれで女性に対する考え方といいますか、戦国の各英雄、各武将にそれぞれのパターンがあると思いますが、秀吉の対女性観というのはどんなものでしょうか。

池波　高貴な女性を好むといわれますね。

三国　ほう。

池波　事実、家康という人は話はべつだけれども、自分の家来の未亡人なんかを自分のものにするんですよ。ごく身分の低い……。

三国　わざわざそういう人を選ぶかのように、そうしておりますね。

池波　金がかかりませんしね（笑）。

三国　むこうは喜びますし……。

池波　喜びますし。金はかけないけれども、子どもが生まれればちゃんとしてやる。戦争に出ていくときも、お妾さんたちがみんな真っ黒い体して、ワラジはいて、家康の着物をかついで、兜をかついだりして、関ヶ原でもいくんですよ（笑）。そう

いうところがあるんですね。

秀吉はやはり、大名の娘とかお公家さんの娘を選ぶということで、高貴好みというのは自分の生まれがやはりいやしかったからだなどといわれておりますが、それもどうかわかりませんねえ。

三国　しかし、それはむしろ高貴なる者の独特の何か、持ち味というようなものに敏感で、それが発散するムードを非常に愛したということじゃないですか。

池波　あなたがいまおっしゃったこと、ほんとにぼくも、ある程度そうじゃないかと思っているんですよ。たしかにそういうところがあると思います。とにかく、色好みといわれるけれども、当時の大名としては普通ですよ。

三国　色を好まないほうがむしろおかしいんじゃないでしょうかね。

池波　まして、子どもがなかったんですから。

三国　はい。

池波　そんな特別な色好みじゃないと思いますね。家康のほうがヘンな話だけど……。

三国　それは何か、むしろ陰湿な、計略的な色好みじゃないですか、家康のほうが。

池波　そうらしいですね。健康な、よく働く足軽の末亡人なんかだから、また子どももよく生まれるわけですよ、いろんな子がね。若い頃に長浜の城主だった頃に誰かに産ましたという子どもが一人いたという話がありますね。

三国　そうですか。

池波　その子どもの名前が竹生島の神社に出ているという。十年ばかり前に資料が発見されたといわれてますけどね。ですから、そういう人が、長年お妾さんがたくさんいても子どもができなくて、突然五十を過ぎて秀頼やなんかが生まれてくるでしょう。だからそれは秀吉の子じゃない石田三成の子だとかいわれるエライことになってくるわけです（笑）。

三国　江戸の徳川の時代になってからも秀吉に対する愛好というか、追慕というか、そういうものが民衆の間にずっと続いていたと聞きますけれども、物語のなかにせよ、秀吉という人は長く生き続けている英雄であるといえましょうね。

池波　それはそうだと思いますね。これは、いくら家康が天下を取った江戸とはいいながら、文化的にはもう一つ上の上方――京都、大坂ですね――における人気というものは、秀吉亡きのちもずっと続いてきて、そこからいろんな本も生まれたので

しょうし、伝説も生まれたのでしょうし、とにかくそれだけ上方における秀吉の人気というのは大へんなものであったわけですね。

ゆえに家康がそれを非常におそれたわけですね。いわゆる豊臣びいきの雰囲気がいつまでも濃厚だったんじゃないですか。というのは、秀吉という人は皇室と非常に仲がよかったでしょう。皇室によくしていたでしょう。ですから、やっぱり京都の人は悪くいいませんね。家康は天下を取ってからも後水尾上皇の話をはじめとして、皇室を徹底的に屈服させようとして、ものすごい政略を使いましたからね。

三国　これは一貫した政策のようでしたね。

池波　ええ。

三国　それに対する一つのレジスタンスというか、そういった気分は関西のほうに十分温存されていた……。

池波　温存されていたんですね。

三国　あれで秀吉が一番愛した女性というのは誰なんでしょうか。

池波　淀君じゃないでしょうかね、やっぱり。ほんとうの意味からいったら先妻のおねねさんでしょうね。

三国　淀君という人は、どうなんでしょうね、良妻ですか、悪妻ですか、賢妻ですか。

池波　それはもう、豊臣家にとっては完全なる悪妻でしょうね。女らしい性格の赴くままにそういうふうになってしまったということで、女らしいということは人はよくいいますけれども、豊臣家にとっては大へんな悪妻になってしまいましたね。

三国　秀吉と淀君の間柄というのは、どうなんでしょうか、悪妻ではありながら、やはり、大へん尊敬していた妻ということになりますか。

池波　尊敬というよりも……。

三国　恐れていた……。

池波　ある意味で一応は拝み倒して、あるいは強引なという感じで自分の主人である信長の、つまりその妹の子ですわね。だから大事にしなければならないということで、一生懸命大事にしたことは事実でしょうね。

　ねねさんのほうは、妻というよりも、肉親ですわね。家内というものは、何十年も一緒に暮らしていれば肉親になってしまうわけですから、相当、おねねさんにも気兼ねをする、淀君にも気兼ねをするというんで、なかなか忙しいんですよ。手紙

を読んでいると、ほうぼうへお世辞をつかっている。奥さんにはお世辞をつかい、淀君にはお世辞をつかい……。

三国　かなり濃厚なことばを使って……。

池波　〝帰ったら口をすう〟とか〝夜をたのしみに待ってろ〟とかいってますよ。

三国　そういうところは非常に人間らしくて好きですがね（笑）。

池波　死ぬときなんかはほんとに人間らしいですね、あの遺言がね。家康をはじめ、大老の大名に〝頼みます、頼みます〟といって泣きついてるところは恥も外聞もないですよ。何とかして自分の死んだあとに――いくら頼んでもなかなかそうはいかないだろうとは思うけれども、しかし頼まずにはいられない。あわれですよ、だから、そこにまたぼくらは秀吉に対する愛情を感ずるわけです。

三国　全くそうですね。

池波　家康のほうは、オレが死んだあとで秀忠がダメだったらいつでも攻め滅ぼしてよろしい、といって死ぬんですからね。反対ですよね。

三国　ドライなものですね。

池波　ええ。だけど、政治家としてはやはり一般国民としてはあとのほうが頼りにな

りますねえ。

三国　その点、秀吉は政治家としてはちょっと失格の面が多かったんじゃないですか。

池波　多いのです。というのは、家康のように側近なり、自分の譜代の家来とか大名というのは、ほとんど肉親のような家来がいるわけですからね。本多平八郎、榊原康政とかね。そういう家来に恵まれてないわけでしょう。

三国　そういうことですね。

池波　父祖代々の家来というのがいない。ただ頼りになったのは大和大納言の秀長（弟）だけです。これに死なれたときはものすごいショックだった。

三国　そうでしょうねえ。

池波　ですから、自分は弟の秀長にあとを譲って秀長がうまくやってくれて、鶴松が成長したときに鶴松にやってもらおう、これでいけばいいと考えていた。ところがみんなダメになっちゃったわけですからね。

大和大納言秀長は立派な政治家だったらしいですよ。

三国　そうだそうですね。しかし人心収攬というか、民心をつかむということはやは

り苦労人だけあって、秀吉は何ともいえない妙味があったんじゃないでしょうか。

池波　それはそうですね。俳優でも舞台に出てパッとあかるい……十五代羽左衛門のような……。ああいうのが出てくると……。

三国　出てきただけでうれしいという……。そういうところ、ああいう華やかなものはほんとに身についたものですね。

池波　身についたものです。わざわざじゃない。ですから清正なんかも、ああいう地味な人に見えてそういうところがあるんですね。

三国　ありますね。城をつくらせれば立派なものができますし……。

池波　景気よく酒飲ましてね。歌を歌って、踊って、という一面があるんです。この派手好みというのは、秀吉はやっぱり信長に仕込まれたものだと思いますね。

三国　そこでつながりますね。

池波　その信長、秀吉の派手な人が天下を支配して安土・桃山文化ができたあとでガタッと地味になっちゃってね。その反動で逆の文化が出てくる。

三国　綱吉につながる……。

池波　ええ。オレは将軍だから、こんなことしてなくてもいいんじゃないか、もっと

ゼイタクしてもいいんじゃないかという気になったわけですね。

家康なんか、将軍になってからも江戸城で冬、大名が伺候しておじぎをしてますと、そこの前を通るでしょう、見ると足なんかむろん素足ですよ。アカギレだらけで血が吹き出てたといいますね、真冬でも。足袋（たび）なんかはくにしても、つぎはぎだらけです。着物でもつぎはぎだらけでびっくりしたということを前田の殿さまの前田利常が……。

三国　それを見てしまった……。

池波　少年時代に江戸城へ上って、こういう大御所のああいう足を見たということを書いてますよ。

三国　しかし、家康という人も徹底した人ですね。

池波　質素な人ですね。

三国　どうですか、秀吉があんまり派手にやったのを見ててそうなったということもありますか。

池波　やっぱりそうじゃないでしょう。

三国　性格ですか、生来の。

池波　性格ということは、そういうふうに倹約していろんなものをためておかないと……おやじの頃からずいぶんそういうめに遭ってますからね。

三国　なるほど。家康も苦労人ですからね。

池波　でも、家康もなかなかケチなようでいて、お客なんかするときは大へんだったらしいですよ。お料理は。

三国　デラックスですか。

池波　ええ、デラックスだった。料理人がお椀をつくって持ってきたら、味をみて、これはダメだ、と。お椀なんてものは味を三十種類ぐらいつくっていいんだ、ムダなものは捨ててもいいんだ、お客がきたときはそういうふうにしてもてなすものだ、といってますよ。

三国　大へんなグルメですね（笑）。そういう面もあるんですか。

池波　あるんです。そのかわり自分は、ふだんは味噌か何かで食べてるんですけどね。

三国　秀吉になると、自分もご馳走を食べ、お客さまにもご馳走を食べてもらってワーッとやろうじゃありませんか、ということですね。

池波　そうです。

ぼくが感心するのは、あの戦争をしている最中に――これは家康もそうですけど、秀吉でも、戦争をしながらお能なんかも習って、天皇の前で舞ってみせて、これが大へんよかったというんでしょう。家康が鼓を打って――。

三国　美しい風景ですね。

池波　だから、相当あの時代の人たちは優秀だったんですね。

三国　そうですね。

現代の政治家に、秀吉の一生はサラリーマンの生き方のお手本になるというような考え方もあるようなんですけれども、何かそういうふうに、ほんとうに現代の処世術で学ぶものはございますか。

池波　それは学ぶところは大いにあると思いますね。人ひとによって、いろいろあるでしょう。

ただ、ぼくらが家康、秀吉を学ぶということでは、いまの政治家なり何なりという官政界人としては、もう少し仕事とか政治だけじゃなくて――。政治家でも……映画を見る政治家なんてほとんどいませんよ。一年に一本ぐらいしか見ない人で

す、みんな。

三国　それも、何かご招待の特別試写会か何かで……。

池波　そう。芝居も見ませんし、音楽も聴きませんしね。ですからアカ抜けないんですよ。ドロくさいんですよ。明治までの政治家というのはそうじゃない。

三国　詩歌管絃の心得がありましたしね。

池波　自分たちは田舎者であるから努めていろんなことを知らなければいけないというので、伊藤博文にしろ誰にしろ、いろいろ俳優との交際もありますし……。

三国　文人墨客とも交際がありましたし。

池波　そうそう。詩もつくるし、勉強するし……いまは……。

三国　年に一回、なんか多勢ひと集めするだけで……。

池波　秀吉でも、家康でも、文化的なことをいろいろしている。大っぴらじゃなくて、自分の修業のためにね。意識をもっと強めるためにしているわけでしょう。ですからやることがアカ抜けてると思いますね。街づくりにしてもアカ抜けてるんですよ、結局。いまはみんなドロくさくなっちゃった。

三国　ですからモーレツ社員もいいし、お金儲けなさるのもいいが、やはりアカ抜け

てもらいたい。

池波　そう。それが何も、芸術の世界にしてくれということじゃなくて、街づくりなどに全部影響してくると思いますよね。

三国　なるほど。

池波　日本橋の上に橋をかけたり、そんな阿呆なことやらないと思うんですよ、秀吉や家康だったら。

〈インタビュー構成〉

実録・鬼平犯科帳

〝鬼の平蔵〟登場

「鬼平」とは鬼の平蔵、
江戸の放火と盗賊を取締る火付盗賊改方の長官・長谷川平蔵に江戸の暗黒街がたてまつった呼び名である、と小説の中では汲みとれる気がする。池波正太郎さんによってすでに十年以上も書き続けられている小説『鬼平犯科帳』によって、長谷川平蔵は現代によみがえった。

――「鬼平」という名前はどうしてつけたんですか？

池波　これは自分でつけたんですよ。つまり鬼のように恐れられているということで、題名にね。

――実際そうだったんですか、長谷川平蔵という人物は？

池波　実際には「鬼」というふうには呼ばれていなかったでしょう。
私は長谷川平蔵のことを色々調べて、生いたちとかそういうところに非常に共感をもったわけなんですね。でこれなら面白いんじゃないかと思って平蔵の一生をだいたい

一年ぐらい連載して終えるつもりだったのが、わりあい評判よかったものだから十年間続いてきたわけです。

――火付盗賊改というのはどういう役目なんですか？

池波　江戸の警察といったらまず町奉行所ですよね。今でいえば都庁と警視庁とを兼ねたような……。ところが役所の機構は複雑になってましてね、犯人が寺なんかに逃げこむとそこは寺社奉行の管轄ということで町奉行がすぐ踏みこんでつかまえるわけにはいかない。或いはまた犯人が江戸の外に逃げた場合は、それをすぐ追いかけるのに手続きがいるわけですよ。火付盗賊改というのは、火付けと盗賊という犯罪を扱うわけですが、そういう捜査を自由に活動できるようにと新しく作られた一種の特別警察ですな。或いは戦国時代の警察といってもいい。つまり世の中乱れている時の警察のやり方でやるということですね。だから江戸の初めの頃は盗賊改方があったりなかったりしてね、泥棒が少ない平和な時はないが、世の中乱れてくると新しく任命したりして……といったふうなのが、だんだん常任のようにずうっとあるようになったんですよ。つまり、放火や盗賊がふえたわけですよ。江戸も中頃に入ると犯罪がふえたということでしょうね。

鬼平が活躍した時代

それは今からおよそ二百年前、天明三年七月の浅間山大噴火に始まる激動の時代であった。

まるで浅間山の噴煙が太陽を隠して起きたかのような天候不順、そして冷害凶作。

はやり病いがはびこり、その中で数十万の農民が飢えのために死んだ。世に言う「天明の飢饉」、しかも凶作は数年間続いた。

全国に起こった百姓一揆の波が都市へと及ぶ。天明七年五月、江戸、大坂など全国主要都市で米屋が襲われたいわゆる「天明の打ちこわし」は民衆の都市暴動として幕府に衝撃を与えた。しかも江戸では取締りに向かった町奉行所の手勢が追い返されるなど徳川封建体制そのものが危機にさらされていた。

翌月、三十一歳の白河侯松平定信が老中首座として政権の座にのぼる。

史上名高い「寛政の改革」の開始であった。

そしてこの時から三か月後に一人の旗本が歴史の表舞台に登場した。

火付盗賊改長谷川平蔵宣似（のぶため）。

本所二ツ目に住み、幼名銕三郎（てつ）。若い日々無頼の徒と交わり、「本所の銕（てつ）」とあだ名された男である。極度に悪化している江戸の治安維持、秩序の回復が四十二歳のこの男に課せられた任務であった。

――火付盗賊改というのは大変な役目だから、かなり部下を使っていたんでしょうね？

池波　火付盗賊改方の長官というのは旗本先手組（さきてぐみ）の中から選ばれるわけです。先手組というのは軍の先鋒という意味ですから、戦争になれば徳川勢の先陣をつとめるという名誉ある職ですが、武力としても弓や鉄砲があって強力です。火付盗賊改というのはこの先手組の一隊をひきいて務めるんです。人数は与力が五、六名から七、八名、同心が三十名前後あるいは五十名ということもあったでしょうね、そういうふうに選ばれた旗本が自分の組の者をひきいてやるんですよ。

それと火付盗賊改方の長官というのは、寛政時代の長谷川平蔵にしろ享保年間の徳山五兵衛にしろ、妾腹で若い頃苦労している人が多い。勘当を受けそうになったり、

いじめられたりして世の中のことを若いうちによく見てきている人が大抵なっていますね。

―― 下情に通じていないと駄目なわけですね？

池波 自分一人で深編笠でもかぶって巡回しても目立たないというか、町の雰囲気の中に溶けこんでいくような人でないといけないでしょうね。

―― 長谷川平蔵もですか？

池波 そうです。火付盗賊改方の長官というのは四、五百石取りの旗本で、普通なら一人歩きなんかは仲々できませんけど、この職になると自由です。一人で市中を巡回する。ある時、平蔵が大工の普請場を見て歩いていたところ、左官が壁を塗っていたそうですよ。するとそれをパッと見ただけで、あの左官は泥棒だと言うんですね。実際にそれが泥棒で、それをつかまえたという記録が残っていますよ。

―― よほど日頃からみんなの中に入っていたんでしょうね？

池波 そう、よっぽど下情に通じていたんでしょうな。それと、泥棒ってのは盗みの下ごしらえをしておくんですよ、自分が職人になって。左官塗りながら壁の穴なんかに仕かけをしておいて、で家ができた時に忍びこむためのね。だから大工小僧とか

左官小僧とかいう泥棒がいたんですよ、実際に。

――かなり忙しい役目だったんですね？

池波　そうですね、それと、正式な書類に残してない犯罪というのが随分あるんじゃないかと思いますね。たとえば、女の人に乱暴をはたらいて、それが人妻であるとか娘さんであるとかした場合に表向きにすると色んな人に迷惑をおよぼす場合がございましょう？　そういう時は一人で取りしきっちゃうんですよ。つまり書類を出さないんです。書類を出すと表向きになりますから、何々方の女房がこういう泥棒に暴行されたということになると、ご主人にも色んな人にも迷惑がかかる、そういう場合は独断で裁決することが許されていたらしいですな。その時は記録は残りません。

――法律一本やりというんじゃなかったわけですね？

池波　法律というのが今のように細かくありませんから、大ざっぱな線で、あとは当事者の人間的な裁量によるものですから……。それが良い場合と悪い場合もあるということなんでしょうけれどね。

徳川中期、江戸は人口百万をこえ、すでに世界一の大都市だったという。

しかし、膨張していく江戸の陰の部分に「無宿」がいる。家を離れ、土地を離れ、江戸に流れこんだこの人々が、火付盗賊改　長谷川平蔵の捕物の対象であった。

――犯罪の多くが「無宿」によって行なわれたということなんですね。『鬼平犯科帳』に書く盗賊もほとんど無宿者ですか？

池波　なかには例外もございます。ちゃんとした商家の主人で人別帳にも載っている人が、陰にまわって泥棒やっているという場合もありますから。さっき言った大工小僧なんていうのも、やはり大工としての人別はあるんでしょうね。でも大体は無宿ですね。

――『鬼平犯科帳』の中では、盗みのことを「盗（つとめ）」と書いておられますね？　これには何か理由でも？

池波　ぼくが書く泥棒というのは、やっぱり泥棒の身になって書く。泥棒を書く時には泥棒の気持になって書きませんとね。

世の中というのは、上から下まで、将軍であろうが、侍であろうが、大きな商家であろうが、みな泥棒と乞食の集まりだっていうのが泥棒の論理、論理というか自分た

ちの悪いことをカバーするための理屈なんですよ。だから悪いことをしているのは本当に自分たちだけなんだろうか、とね。自分たちは盗みをするんじゃなくて「盗（つとめ）」をするんだ、仕事をするんだ、ということで「おつとめ、おつとめ」と言わしているんですけどね。

もちろんこれは泥棒側に立って書いているわけですから、平蔵から見るとけしからぬということになるでしょうけれどね。しかし、かれらも「おつとめ」と言っている以上、人殺しはしない、怪我さしたり乱暴なことはしないと言うわけですよ。もっとも、そういう掟を持っていた泥棒の社会が、世の中進むにつれてモラルが崩れていったということは、ひとつあるんですよ。

――泥棒のモラルというのはあるんですか？（笑）

池波　それは完全にあったと思いますよ。そういう泥棒さんに話をきいたことがありますから。だから、明治時代にも泥棒のモラルというのはあったわけです。

――どういう所から盗むべしとか？（笑）

池波　そうそう。（笑）

――ねずみ小僧みたいに？

池波　かれらの言うことも一応の理屈はあるような気はしますよ。どんなやつも泥棒と乞食の集まりだというのは……。ぼくら自身を含めてね。（笑）

――　さきほどの「無宿」のことですが、なりたくて無宿になったわけではなかったでしょうね。どうしても社会体制に入れないので無宿になり、生活のために犯罪を犯す……？

池波　真からの悪党というものもいますがね、生まれついての悪党というのも。でもぼくはそういうのは珍しいと思いますよ。

――　それに平蔵のいささかの同情と心配りもあったんでしょうね？

池波　そうでしょうね。もっとも平蔵というのは、ぼくが書いているような人だったかどうかは、本当はわかりませんがね。（笑）

大成功を収めた「人足寄場」

寛政二年、老中松平定信は、長谷川平蔵の提案によって江戸湾の石川島に「人足寄場」をつくり、江戸市中の無宿者をここに収容した。無宿者激増という江戸の社会問題を解決する最後の手段としてとられた措置である。江戸市中に流入し

た無宿者をこの島に閉じこめ、江戸での犯罪の発生を未然に防ぐと共に、教育によって技術を身につけさせ、元の人別帳に復帰させることが目的であった。

石川島は四面を海に囲まれている。この一万六千坪の敷地に、むしろ、たどん、紙、精米、油しぼり、鍛冶場など様々な作業場がもうけられ、多い時は六百名の無宿者がここで仕事と食事を与えられ、余暇時間には心学の講義も行なわれた。

長谷川平蔵は、「火付盗賊改」の要職に加えて「人足寄場取扱」を命じられ、多忙であった。人足寄場が無宿者対策に果たした役割について、時の権力者、老中松平定信はその『宇下人言』の中で次の様に述べている。

「寄場てふこと出来たり。これによりて今は無宿てふもの至って稀に。前は町々の橋のあるところへは、その橋の左右につらなりて居りしが、今はなし。ここによりて盗賊なども減じぬ」と。

しかし、人足寄場の成功の中で、長谷川平蔵は突然この世を去った。

寛政七年五月、寄場をみずからの手でつくって五年目、まだ五十歳の働き盛りであった。

――『鬼平犯科帳』の中で特にご自身で意図して、小説の底に流れているのはこういうものだ、というものはありませんでしょうか？

池波　ぼくが書いている『鬼平犯科帳』は捕物帳じゃないんです。もちろん捕物もありますが、それよりも泥棒の世界、そして捕まえる者たち――同心、与力、平蔵たち、そういう人間どうしの色々な関わり合いというものを、読む方々が自分の色々な社会に置きかえて読んで下さるなら、そうして頂いた方がありがたいですね。事実そうらしいんですよ。そうでなきゃ十年間も読者の支持が得られないと思います。

――いまから想像されて、江戸というのはいい町だったんでしょうか？

池波　関東大震災にあって江戸の風物は全部破壊されたといいます。事実その通りですけれども、生活の様式とか習俗は破壊されていませんよ。いまのように進歩というか変化は激しくないんですから。だから風景は変わったかも知れないけど、人間の習俗は変わってない。だから、ぼくらの子供の時分にはまだ濃厚に江戸人の生活が残っていたと思いますね。

つまりこういうことなんですよ。ぼくの生まれたところは、浅草の永住町（ながすみ）というとこ

ろですが、私の祖母なんかでも、よほどの用がない限りその町から一歩も出ないわけですよ。つまり、その町に寄席もあれば映画館もある。洋食屋もある、中華料理屋もある、そば屋もある、床屋もあり、お風呂屋があるでしょう。なんでもその町で足りるわけです。だから、ほかの町へ行くことはない。ほかの場所へは余り行かない。これが東京の下町の生活だったわけです。

――私も下町の生まれ育ちですが、そういえば余りよそへ出なかったですね。

池波　子供たちは自分の町で遊ぶだけで十分楽しく夏休みが過ごせるわけでしょうね。江戸の町というのはそういう所なんですよ。町のひとつひとつが独立した生きものみたいなものだったわけです。

だから、江戸っ子は三代続いて本当の江戸っ子というようなことをいいますね、やはり三代ぐらいかからないと、江戸の暮らしというものは身につかなかったわけですよ。助け合いの精神とか色々のものが……。ですから外から来る人はわかっちゃうんです。

――なるほどね。それがまた平蔵の目のつけどころなんですね（笑）

池波　ぼくたちの子供の頃ですら、住んでる人は同じ町内からほとんど出ないわけ

ですからね。だから、そこに誰か知らない人が来ればすぐ目立って、あの人どこの人だということになります。それがもっと厳しかったわけですから、江戸というのは現代にくらべれば随分と平和だったと思いますよ。

でまあ平蔵が活躍するようになるというのは、犯罪がある程度ふえてきたんでしょうね。都市が膨張し、飢饉やなにかで色んな人達が江戸へ流れこんで、今まで通りにいかなくなってきたからじゃないかと思います。

老中松平定信による寛政の改革は、農村重視、農業人口確保を最重点の政策であった。しかし、幕府によって繰り返し出された農村への人返し令にもかかわらず、江戸への人口流入はやむことがなかった。都市はますます膨張し、年ごとにその姿を変えていった。いまから二百年前、巨大都市江戸の無宿者対策に力をつくした火付盗賊改　長谷川平蔵、その墓は都市の巨大化によって何度か行なわれた墓地の郊外移転によって消え失せ、いまその所在はわからない。

解説

八尋舜右

もう、ずいぶんむかしのことになる。

盛夏の銀座で映画の試写会がえりの池波さんとばったり会ったことがある。額から胸もとにかけて、池波さんは玉のようにかがやく汗をしたたらせていた。

そのころ五十代なかばの池波さんは健康そのもの、仕事も自信にあふれており、夏の大粒の汗がとても似合った。

ビアホールでむきあってすわる。冷えた枝豆とソーセージをまえに、大ジョッキで乾杯して、ぐっと一気にあおる。

「たまらないねえ」

「はい、たまりません」

あのときの夏は、もうかえらない。池波さんもかえらぬ人だ。わたしも老いた。夏

は好きだが、盆供養のたびに鬼籍に入った親しい人たちのことをおもいだし、その記憶がすこしずつ遠くなっていくのがさびしい。

かつて、池波さんの年譜をつくったせいもあり、

「まだ、ほかに作品はありませんかねえ」

出版社の友人たちに、しばしばたずねられる。それは、そのまま読者の声とおもっていい。池波さんが亡くなってすでに五年の歳月が経過したが、読者にとって池波さんはまだ生きている。もっと読みたい、まだまだ掘りだしものの作品があるのでは、との期待がつよいのだ。とてもうれしいことだが、もうめぼしい作品はでつくしたのではないかというのが、わたしの偽りのない実感である。で、

「ごくごく初期の短編と戯曲以外には、もうないのでは」

とこたえる。

ところが、熱心な編集者たちはあきらめない。こつこつと紙誌を渉猟して、未収録の作品をみつけだしてくる。この一冊におさめられた作品などもまさにそうである。『さむらいの巣』という作品が『文芸朝日』に執筆されたことはわたしも承知してお

り、年譜にも記載した。ただ、もうとっくに、いずれかの文庫に収録されているものと、おもいこんでいた。が、そうではなかった。編集者のねばり勝ち、お手柄といわねばならない。

『文芸朝日』は昭和三十七年（一九六二）から四十年までの短期間、朝日新聞社から刊行された月刊誌である。池波さんは、そこに二篇の作品を発表している。『槍の大蔵』（昭和三十七年十月号・新潮文庫『黒幕』所収）と、本篇『さむらいの巣』（昭和三十八年六月号）である。

本篇の主人公、徳山権十郎重栄は実在の人物である。『寛政重修諸家譜』をひもとくと、巻の三百八にでてくる。

〔家伝に、坂上田村麻呂四代の孫、左兵衛督貞守より美濃国大野郡徳山を領す。その末孫貞信に至り、徳山をもって家号とす。養子貞長土岐の庶流にして家を継ぎしより源氏にあらたむ。はじめ、とこのやまと称せしを、則秀がときより、とくのやまと唱うという〕

五兵衛則秀は織田信長に仕えていたが、信長横死後、柴田勝家にしたがい、勝家が秀吉に敗れると高野山に蟄居。慶長五年（一六〇〇）、家康に謁して美濃徳山の旧領

五千石を安堵され、以後、徳山家は代々徳川の旗本に列した。

権十郎重栄は、この則秀の五代目にあたる。父五兵衛重俊は幕府の使番、目付、先手鉄砲頭を歴任、元禄十五年（一七〇二）から五年間、火付盗賊改方をつとめた。家を継いだ後、権十郎は本所の火事場見廻りから使番に進み、やがて父とおなじ先手鉄砲頭に転じ、つまり火付盗賊改方の頭となって盗賊追捕にあたった。父子二代にわたって江戸の治安維持にあたったわけだが、このあたりはほぼ史料に忠実に叙述されている。

さて、この作品のテーマは、武士の家、つまり、さむらいの巣についてである。父重俊は謹直な人物だが、嫡子の重朝をかわいがり、次男の権十郎にはつめたい。当時の武家とは、おおむねこのようなもので、血統、家筋を絶やさず維持するところに生のいとなみの根本があったので、自然にそうなるのである。

ただ、権十郎は五十歳をすぎた重俊が、奉公にあがった女中に心ならずも手をつけ、〔うかつにもこしらえてしまった子〕だということもあり、重俊は権十郎の粗暴な振る舞いをみるにつけ、つい、いまいましいおもいにとらわれてしまう。使用人たちも、この妾腹の次男には将来仕えることもないとおもいこんでいるので、これまた

軽視してかかる。

権十郎は多感な少年だけに、それががまんならずに乱暴をはたらき、不満やさびしさのはけぐちを外にもとめ、放蕩の味をおぼえる。亡き母親に似た船宿の踊り子もよを知ってからは、その肉体にいちずに溺れこむ。

もよと逢引きするには金がかかる。で、亡母の実家駿河屋に強盗におしこみ、ついに重俊に勘当される。それまで数々の不行状を知りながら、重俊が権十郎を勘当しなかったのは、あくまで大身旗本の体面をおもんぱかってのことで、できのわるい次男を愛惜してのことではなかった。

権十郎は無宿者となって闇の世界をさまよう。無宿者とは、いまのホームレスとはいささかちがう。徳山家から追放された権十郎は、人別帳（当時の戸籍）から抹消された人別外の無籍者、つまり、人ではなくなったのだ。

さて二年の歳月がながれて、権十郎はおもいがけずも生家によびもどされることとなる。正嫡の重朝が病死したからだ。跡継ぎがいなければ、家は断絶となる。で、重俊はなりふりかまわず、権十郎のよびもどしに懸命になった。そんな父に、

〔跡つぎがほしいなら、どこからでもよい、養子をとれと父上に申せ〕

権十郎はせいいっぱいの皮肉をもってこたえる。

しかし、病床の父が「見栄も体裁もなく、ただ一行、ふるえをおびた筆で「ゆるせ権十郎」と書きおくってきた書状をみると、やはり心をうごかされた。意地をはりあっていても、そこは血のつながる父子である。

権十郎は父のもとにもどって徳山家を継ぐ。愛憎の葛藤を超えて、さむらいの巣の血統は維持されたのである。

ここに描かれたような封建時代のお家たいせつの感覚とはちがうが、池波さんもまた家庭、家族をたいせつに考えた人だった。かつての無頼派作家は家庭をこわし、家族をすてるところに、おのれの文学のレーゾンデートルを賭けたが、池波さんは無頼派ではない。しっかりした家庭、家族が背後にあってこそ、作家は責任ある仕事ができるのだ、といったふうの考えの持ち主だった。

「あのね、男はいつ死んでも、あとの者が困らないようにしておかねばいけないよ」

こんなことばを、わたしはいくども聞かされている。

池波さんは、六歳のとき両親が離婚している。人間の巣も、やはり両親がそろっていてこその巣である。万一、やんごとなき理由で男が巣をでていかねばならぬときに

は、のこる妻子のために、きちんとなすべきことをなしてからでなくてはならない、と池波さんはいいたかったのかもしれない。

ところで、『さむらいの巣』は、武家の跡継ぎ話だけがテーマではない。父の名を継いで五兵衛重栄となった権十郎が、火付盗賊改方の頭として日本左衛門の召し捕りをはじめ縦横に腕をふるうさまなどが、じつに活き活きと描かれてい、後年の『鬼平犯科帳』シリーズの世界を彷彿させるものがある。京は祇園社の茶店の女将お梶との恋愛から、超俗の画家池大雅の妻となった玉瀾が生まれたという粋な筋立てなども巧みに組みこまれており、池波小説の魅力が横溢している。

ちなみに、この徳山父子をあつかった作品に、『さむらいの巣』が書かれる四年まえ、『大衆文芸』に発表された『秘図』という作品がある（新潮文庫『賦将』所収）。両作品には微妙なニュアンスのちがいもあり、読みくらべてみられるのも一興だろう。

本書には、このほかに歴史読み物の『無惨やな　猿子橋母子の仇討ち』と『真田信之の妻――小松』の二篇、紀行エッセイともいうべき『真説　決戦川中島』『関ヶ原古戦場を往く』の二篇、さらには、『豊臣秀吉』『実録・鬼平犯科帳』の対談、インタ

ビューが収められている。

いずれも池波さんの史観、小説の背景を理解するうえで参考になる文章である。

（作家）

初出一覧

さむらいの巣――『文芸朝日』昭和三十八年六月号
無惨やな　猿子橋母子の仇討ち――『歴史読本』昭和三十七年十一月号
真田信之の妻――小松――『歴史読本』昭和三十九年三月号
真説　決戦川中島――『新評』昭和四十四年十一月号
関ヶ原古戦場を往く――『歴史読本』昭和四十七年九月号
　その後、『動乱の男たち』ゆまにて、昭和五十二年に所収
豊臣秀吉――『歴史と人間1』日本放送出版協会、昭和五十三年
実録・鬼平犯科帳――『歴史への招待1』日本放送出版協会、昭和五十四年

〈おことわり〉

本作品中には一部、今日では差別表現として好ましくない用語が使用されておりますが、故意に作品を損ねないこと、及び著者（故人）が差別助長の意図で使用していないこと等を考慮し、敢えて発表時のまま採録致しました。ご理解賜りますようお願い致します。（編集部）

著者紹介

池波正太郎（いけなみ　しょうたろう）

大正12(1923)年、東京に生れる。昭和30年東京都職員を退職し、作家生活に入る。新国劇の舞台で多くの戯曲を発表し、35年第43回直木賞を「錯乱」によって受賞。52年第11回吉川英治文学賞を「鬼平犯科帳」その他により受賞する。63年第36回菊池寛賞受賞。作品に「剣客商売」「その男」「真田太平記」〝必殺仕掛人〟シリーズなど多数。平成2年5月3日逝去。

ＰＨＰ文庫　さむらいの巣

1995年9月14日　第1版第1刷

著　者　池波正太郎
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町3-10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431
印刷所
製本所　図書印刷株式会社

© Toyoko Ikenami 1995 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-56804-1

実力派のパートナー　PHP文庫好評既刊

霧に消えた影

池波正太郎傑作歴史短編集

池波正太郎

関ヶ原の間諜・蜂谷与助、妻を売る寵臣・牧野成貞、他8編。自らの歴史観・人間観をまじえ、歴史に「影」だけを残して消えていった人物を描く。珠玉の歴史エッセイ。

定価520円
（本体505円）

信長と秀吉と家康

池波正太郎

天下取り三代の歴史を等身大の視点で活写するとともに、人間とその人間の営みが作り出してきた歴史の意味を見事に語る名篇。池波作品・幻の長篇、待望の文庫化。

定価560円
（本体544円）

本能寺の変

光秀と信長・秀吉の悲劇

上田滋

これまであまり光の当たらなかった明智光秀の目を通して見た信長と秀吉とは？　丹念に史料を追いながら、歴史の真実に迫り、英雄たちが身近な人物として迫ってくる。

定価660円
（本体641円）

定価は将来、改定されることがあります。

実力派のパートナー　PHP文庫好評既刊

真田三代記

土橋治重

真田昌幸・幸村・大助が、知謀、奇略のかぎりを尽し徳川に対抗する痛快歴史長編。爆発的な人気を呼んだ『立川文庫』〝真田編〟のネタ本が、現代に鮮やかによみがえる。

定価600円
（本体583円）

智将真田幸村

大坂の陣に本懐を遂ぐ

阿見宏介

大御所・家康の最後の野望に抗することこそ武門に生を受けた者の務めと決め、激闘の中に果てた名将・真田幸村。その清々しいまでの生きざまを描く書下ろし時代長編。

定価620円
（本体602円）

真田幸村

家康が怖れた男の生涯

佐竹申伍

秀吉亡き後、誰が天下を治めるのか？　野望に燃える若き幸村。大坂夏の陣での死を迎えるまで、家康を苦しめ続けた智将の生涯を、生き生きと描き出した長編歴史小説。

定価780円
（本体757円）

定価は将来、改定されることがあります。

実力派のパートナー　PHP文庫好評既刊

合戦
歴史の流れを変えた10のドラマ
松永義弘

本書に描かれた戦国の10の合戦は、武将たちの天下への夢を賭けた戦いであった。その勝敗を分けた作戦・用兵から人柄までを、史跡紹介を交えて綴る歴史ドキュメント。

定価500円
（本体485円）

足利尊氏
乱世の行動学
百瀬明治

室町幕府の初代将軍、足利尊氏。とかく誤解されがちな彼の生涯に新しい光を当てたのが本書。己れの一生の目標のために、あらゆる手を尽くすその知力と行動力に学ぶ。

定価540円
（本体524円）

源義経
東下りに秘められた謎
三好京三

頼朝との密約により、腰越から京へ引返した義経は、もう一組の義経主従を結成、別行程で奥州平泉に向かったのだった。――悲劇の英雄を新しい解釈で描く長編小説。

定価700円
（本体680円）

定価は将来、改定されることがあります。

9784569568041

ISBN4-569-56804-1

C0193 P500E

1910193005005

定価500円（本体485円）

さむらいの巣

池波正太郎

宝暦七年、侍・徳山五兵衛が波乱に満ちた六十八歳の生涯を終えた。五兵衛は若い頃、一人の少女への恋慕の念から、土蔵から盗み出した宗珉作の笄（こうがい）を贈った。その笄がこれほど数奇な運命をたどろうとは……表題作「さむらいの巣」ほか全7編を収録。味のある短・中編小説、歴史紀行とエッセイ、およびインタビューで構成。歴史ファン、池波ファン待望の一冊！

PHP文庫